

テニス百門の断面図

歿後100年記念 森鷗外旧蔵書展

西暦千八百三十二年
 子を公よしたる
 たりたる反法皇思想
 紀の文學は及ぼ
 書肆のかゝる書を引き受
 作者がブリエレ、ロセツチイ
 資を捐て、印行したり。ロ
 事は累せられて、ナポリを逃
 の伊太利語教授を勤むる
 ロセツチイは書を善くし兼
 のナポリにありしときは、博物館に奉仕しておた
 ちたる官吏たりき。千八百二十年七月革命軍
 起るや、ロセツチイ詩を賦してその譽を稱せ
 その詩大に民兵の闘はるは行はれぬ。ナポリの戦
 より舊政府の軍漸く利を獲るやうなりて、
 ロセツチイは對する追捕の沙汰聞えしがば、
 ロセツチイは英吉利士官の服を着けて英吉利軍

ンセス、ポリドリ Frances Polidori を娶り、その腹
 は男の女女性の二人の子をもうけた。
 ロセツチイが書はダンテ、ペトラルカ、ボツカチカ等の作
 秘密なる政治思想ありとなせしあり。神曲中の
 獄は此人のためには當時の羅馬さながらうを
 見えしなり。
 の書は對する是非の聲は伊太利國內は喧く、
 延いて隣邦に及びぬ。獨逸の人アウグスト、井ルム、
 フォン、シユレエゲル七亦書を著しこれを致したり。ロ
 十二年は世に出でたり。
 陸軍 醫 學校
 法皇を憎し心はその家
 フランキスカはダンテが影とり
 ナ、ジェオルのジナ七女作家
 男子の方では、弟なる

目次

ごあいさつ1

テエベスの薨— 鷗外文庫の深奥から3

展示資料解説

I. ガブリエーレ・ロセッティのダンテ受容に関する草稿6

II. Die Grenzboten7

1. 医学生鷗外9

2. 職務に向きあう17

3. 知識への渴望27

4. 人脈のなかで35

5. 作品への通路45

参考文献54

展示資料一覧56

(展示委員会委員名簿)

(奥付)

展示資料解説 [凡例]

* 資料番号 (章番号—章内通番)

* 書名

* 著者

* 刊年 (西暦)

* 総合図書館請求記号は巻末の展示資料リストに掲載

* 解説末尾の (姓) は解説執筆者 (巻末執筆者一覧に掲載)

* 解説末尾に (姓) の記載のないものは展示委員による

* 解説末尾に (姓、一部改編) とあるものは、鷗外文庫書入本画像データベースの解説に、今回の展示に合わせて展示委員が手を加えたものであり、文責は展示委員会にある。

本来の解説の全文は画像データベースを参照されたい。

<https://iiif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogai/>

ごあいさつ

東京大学附属図書館では、毎年、全学で所蔵する貴重な資料を学内外の皆様にご覧いただくため特別展示を行っていましたが、主な展示会場である総合図書館の改修工事により、やむを得ずしばらく休止しておりました。2020年に改修工事が終了し、森鷗外の歿後100年に当たる本年、8年ぶりの特別展示会「テエベス百門の断面図——歿後100年記念 森鷗外旧蔵書展」を開催いたします。

「テエベス百門」とは、本学医学部教授でもあった詩人の木下杢太郎（本名太田正雄）が、敬意をこめて森鷗外を「テエベス百門の大都」と呼んだことにちなみます。この呼び名の通り、鷗外は軍医・官僚・作家・詩人・翻訳家など、実に多様な顔を持っており、その多くで卓越した業績を残しました。これを踏まえ、本展示会では、総合図書館で所蔵している鷗外の旧蔵書、鷗外文庫から、これまでに展示されたことのない資料を多く含む、厳選された貴重な資料を展示いたします。広範な分野に亘るさまざまな資料を通して、鷗外の知と教養の多面性を感じていただけるよう企画いたしました。

鷗外文庫は、1,000冊を超える武鑑（大名や旗本の姓名・出自・職務・石高等を掲載した名鑑）や江戸古地図をはじめ、和・漢・洋の幅広い分野にわたる、約19,000冊のコレクションです。今回の展示では、「医学生鷗外」「職務に向きあう」「知識への渴望」「人脈のなかで」「作品への通路」の5つのコーナーを用意し、本展ではじめて披露する新出草稿をはじめ、鷗外が読書をしながら書入れをした蔵書や自筆本など、約100点をご紹介します。

東京大学総合図書館は、大正12年（1923）の関東大震災で図書館の全焼、資料の焼失という甚大な被害を受けました。その後、ロックフェラーJr.氏の寄付による図書館の再建に加え、国内外から数多くの資料の寄贈をいただきました。今回展示いたします鷗外文庫も、大正15年（1926）1月に森鷗外の遺族から寄贈されたコレクションです。当時の図書館の整理方針に基づき、長らく各分野の書架にばらばらに収められておりましたが、平成17～21（2005～2009）年度に遂行された整理プロジェクトにより、資料の別置と書入れ状況の悉皆調査が行われて全貌が明らかになりました。その成果とも言える、鷗外文庫書入本画像データベースがインターネット上で公開されておりますので、そちらも併せてご覧いただければ幸いです。

このたびの展示は、本学総合文化研究科出口智之准教授の指揮のもとで開催されます。出口先生には、さらに、寄稿と講演もお願いしました。皆様には展示物とともに、出口先生のご発表もぜひお楽しみいただきたいと思います。

令和4年10月
東京大学附属図書館長
坂井 修一

テエベスの薨—鷗外文庫の深奥から

東京大学大学院総合文化研究科准教授
出口 智之

歿後100年を経てなお、鷗外文庫の大部分は立入ることの困難な迷宮である。

はじめてこの名を耳にされるかたもおられようかと思ひ、簡単に注しておく、鷗外文庫とは東京大学総合図書館が所蔵する森鷗外旧蔵書の総称である。大正11年7月、すなわち本令和4年から遡ること100年前に鷗外が他界したあと、遺族の手によって、蔵書の多くが当時の東京帝国大学に一括寄贈された。相続による分割が惜しまれたのと、大正12年の関東大震災で甚大な被害を蒙った図書館の復興とが、その理由であった。寄贈された書籍のすべてに、鷗外と親交のあった画家・書家の中村不折が作った「鷗外蔵書」朱方印が押され、ここに鷗外文庫が誕生したのである。

時を超えて平成17～21年度、図書館は同文庫の整理プロジェクトを遂行した。まず、書庫内にばらばらに配架されていた鷗外旧蔵書を特定・集約別置したうえで、全点全ページを目視確認し、鷗外自筆か否かにかかわらず、すべての書入れを調査票に記録する。そのうえで、重要と判断される自筆・他筆の写本や書入れについて、デジタル画像化するとともに解題を附し、データベースとしてウェブ上に公開するという企画であった。これにより、およそ19,000冊にもなるろうとする鷗外文庫の全容がはじめて明らかになった。

以上の経緯については、東京大学学術機関リポジトリでウェブ公開されている、平成24年度東京大学附属図書館特別展示『鷗外の書齋から——生誕150年記念 森鷗外旧蔵書展 展示資料目録』に詳しく書いておいたので、あわせて参照されたい。

かくして資料のほぼすべてが特定され、図書館の請求記号には「鷗」の印が附され、検索もアクセスも容易になった鷗外文庫の大部分が、なお迷宮であるとはどういうことか。それは、蔵書の著しい多様性と、そこに含まれる龐大な書入れとが、いまだ本格的な調査研究を拒み続けているからである。

かつて、劇作家・詩人の木下杢太郎は鷗外を評し、「森鷗外は謂はばテエベス百門の大都である。東門を入つても西門を窮め難く、百家おのおの一両門を視て他の九十八九門を遺し去るのである」と述べた（『森鷗外』、『岩波講座日本文学』第10巻、岩波書店、昭和8年1月）。坂井修一附属図書館長の命名にかかる本展タイトル、「テエベス百門の断面図」でも参照したこの比喻は、鷗外の学問と知識、それに仕事の幅広さを、古代エジプトの紫都テーベに見立てている。われわれが読む鷗外の遺した文章が、いわば百の門から入って歩く通りだとすれば、鷗外文庫はその通りと通りのあいだを埋めつくす屋宇である。入ってみねば何があるかわからず、またその裏手がどこに通じているかも判然としない、無数に並ぶ薨なのだ。

もちろん、著名な書籍はいくつもある。大正期に書かれた歴史小説や史伝の典拠資料は、多く全文が翻刻公開され、研究も盛んである。ドイツ留学から戻ったばかりの若き日に手掛けた訳詩集、『於母影』（明治22年）の翻訳原本Maximilian Bern (ed.), *Deutsche Lyrik : seit*

Goethe's Tode (Leipzig : P. Reclam, n.d. 資料5-17) なども、参照される機会が多い。それらは、本学図書館や諸文学館等での展示にしばしば出展されてきたので、ご覧になったことのあるかたもおられるだろうし、上記データベースなら時と場所を問わずに参照可能である。

しかし、そうした展示にかかわらず、またデータベースにも録されていない大多数の資料は、依然として書架に眠ったままである。東京大学OPACで検索すれば、鷗外文庫の総目録は簡単に出力できるとはいえ、万を超えるそのリストを地道に調査し、重要そうな資料をすべて実見して確認するには多大な手間を要する。また、OPACには書入れの有無までは記載されていないから、その方向からの調査は不可能である。したがって、研究者や学芸員がアクセスすることもほぼなく、重要性どころかその存在すら知られず、結果として一般の目にふれる機会のまったくない資料が、山のように堆積しているのである。

鷗外文庫の書籍全点を、デジタル画像で公開すればよいだろうか？ たしかにそれは理想だが、簡単にできる規模ではないうえ、資料の内容や書入れの有無を順に確認してゆかねばならないのは、ウェブ上とておなじことである。では、上述の調査票を公開してはどうか？ しかしこれはあくまで作業用で、信頼して利用できるデータにするためには、毛筆や独文の肉筆に慣れた研究者が、龐大な書入れをあらためて翻字せねばならない。また、単に書入れの内容だけをテキスト化しても不便きわまるから、最低でも当該ページの画像化と連動させることが必要で、これまた容易ならぬ作業である。

将来的には、そうした利便性・網羅性の高いデータベースができることを切に願いつつ、しかしその完成を待っては、鷗外文庫はいつまでも生きない。そう考えて、鷗外歿後100年を記念する本展では、これまで出展される機会のなかった資料を積極的に選んだ。鷗外文庫の深奥に秘められた、鷗外という文人の知の豊かさを、ぜひご堪能いただきたい。

第1章「医学生鷗外」では、(旧) 東京大学医学部に通ったころから、留学時代に用いられた資料を選んだ。自身もはじめ蘭方医学を学んだ鷗外が、若年時に読んだ痕跡を残す杉田玄白『蘭学事始』(資料1-3) や、弟の篤次郎(三木竹二) とともに愛読したらしい曲亭馬琴『松焚秋七草』(資料1-14) などは、これまでほぼ出展されたことのない資料である。

第2章「職務に向きあう」では、文学者である以前に陸軍軍医であり、退職後は皇室博物館総長兼図書頭となった鷗外の、職務に関わる資料を取上げる。ドイツ留学時代に勉強のため作成したノート、*Noticen, 1884-86* (資料2-1) は、昭和58年の「鷗外文庫展」以来の出展である。多数所蔵のある陸軍関係の資料や、自筆書入れが見られる『帝国美術院第三回美術展覧会陳列品目録』(資料2-21) も珍しいだろう。

第3章「知識への渴望」では、文学にも職務にも直接結びつかない、鷗外の幅広い知識欲を示す資料を選定した。交流のあった評論家・翻訳家の内田魯庵が伝える、「何でも書物は一生の中一度役に立てばそれで沢山だ。そういう意味で学術的に貴いものなら何でも集めて置く」という鷗外の言葉を(「森鷗外君の追憶」、『明星』大正11年8月)、われわれは鷗外文庫の前で実感することができる。

第4章「人脈のなかで」では、蔵書にうかがえる鷗外の多彩な人脈を示した。平成24年度の展示では、与謝野晶子・石川啄木・北原白秋・斎藤茂吉らから贈られた本を出展したが、今回は高浜虚子や萩原朔太郎、小山内薫といった文学者に加え、旧藩主の亀井家、医師の呉秀三、

哲学者の井上哲次郎、美術史家の大村西崖らの本を選んだ。夏目漱石・幸田露伴・吉井勇・永井荷風の雑誌掲載作品を、鷗外自身が切抜いて製本した一連の資料には、そうした作家たちへの敬愛が感じられる。

第5章「作品への通路」では、文学作品の典拠資料や翻訳原本を扱った。この章はしばしば展示される資料が多めだが、短篇「カズイスチカ」につながるような傳青主『女科』(資料5-10)や、江戸時代の裁判の様相を伝えるガリ版刷りの講演録、佐久間長敬『裁判百話』(資料5-12)などは、展示の機会がまずなかったはずである。

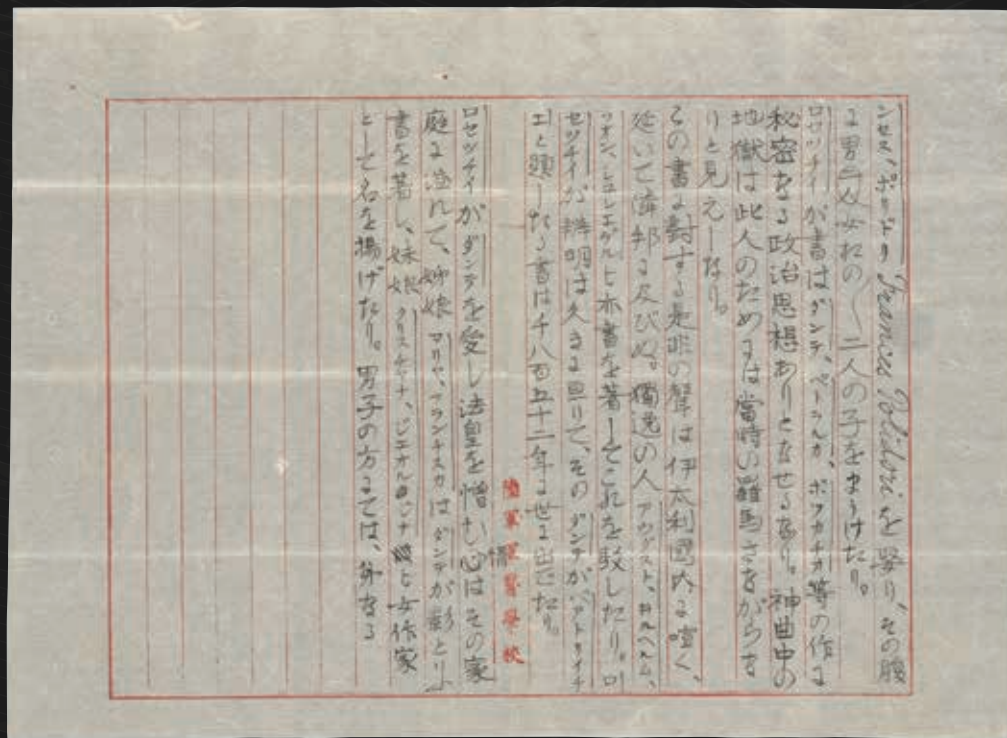
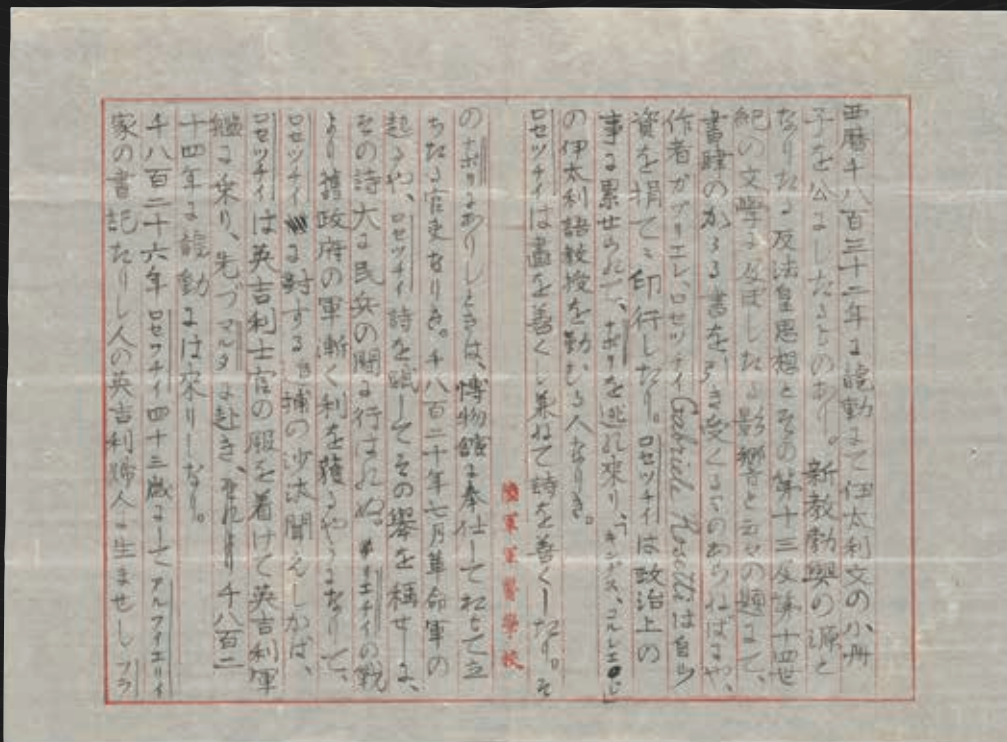
こうした蔵書にうかがわれる、鷗外の知と教養の宏大さとは、はたして何であろうか。

鷗外は医学生時代、ドイツ語で行われた講義を直接漢文で書取っていたと伝わる(緒方収二郎「森鷗外君の追憶」、『明星』大正13年7月)。しかし、しばしば驚嘆されるそうした言語能力が、彼のすごさの本質ではない。10代にして、高度な学術的内容を第2言語から第3言語へ直接筆記することが可能な語学の才人は、おそらくほかにもいただろうし、現代にもいるだろう。鷗外の傑出は、そのドイツ語の向こうに広がる西洋医学やヨーロッパの哲学・歴史・芸術文化と、漢文の向こうに広がる和漢のそれとを、ひとしく知の領野におさめていた点にこそ存している。

本展ではじめて披露される新出草稿(資料Ⅰ)と、それがはさまっていたドイツ語雑誌*Die Grenzboten*(資料Ⅱ)*の書入れだけを見ても、イタリア・英国・ドイツ・フランスの多種多様な領域への興味関心がよくわかる。そして、そのひとつひとつの関心がほかのどの資料とつながっており、いかなる連関のなかでどう作品へと結実していったのかは、いまだ未解明のことばかりである。何しろ鷗外文庫には、幕末水戸学の巨魁、会沢正志斎がキリスト教を批判した『豈好辯』(文政11年跋、鷗外若年時の読書)、山県有朋の序を有し、陸軍入省のころに読んだ形跡のある小林雄七郎訳『拿破崙^(ナポレオン)第一世伝』(陸軍文庫、明治13年11月)、国学者の黒沢翁満による奇書『藐姑射秘言』(安政6年跋)、大正期の帝展の内紛を伝える鷹田其石『文部大臣ニ提出セル帝国美術院展覧会廃止卑見』(私製、刊年不明)、デンマーク語で書かれた露土戦争の記録C. F. Wahlberg, *Anteckningar fran Rysk-Turkiska kriget, 1877-1878* (Helsingfors: Hufvudsbladets, 1878) など、とても出展しきれない魅力的な資料がまだまだ眠っているのだから。

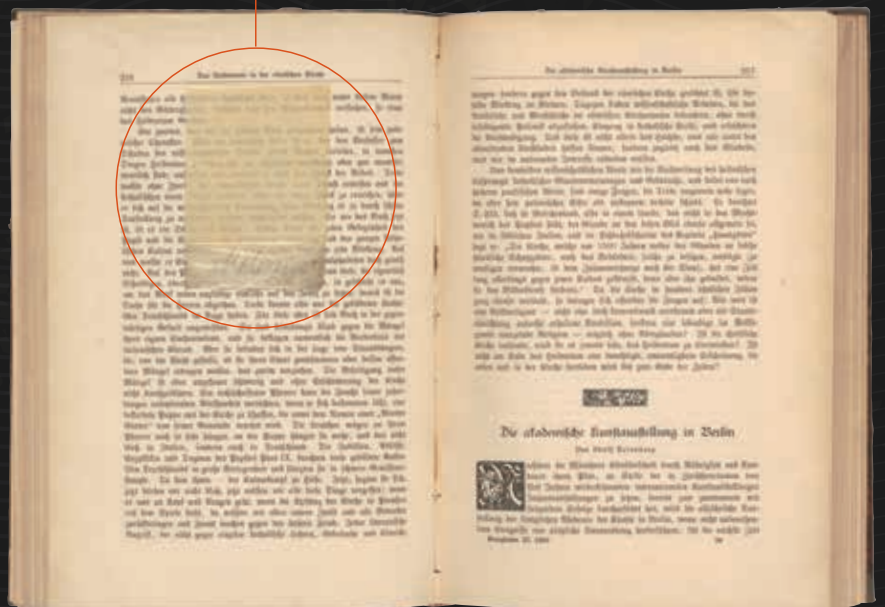
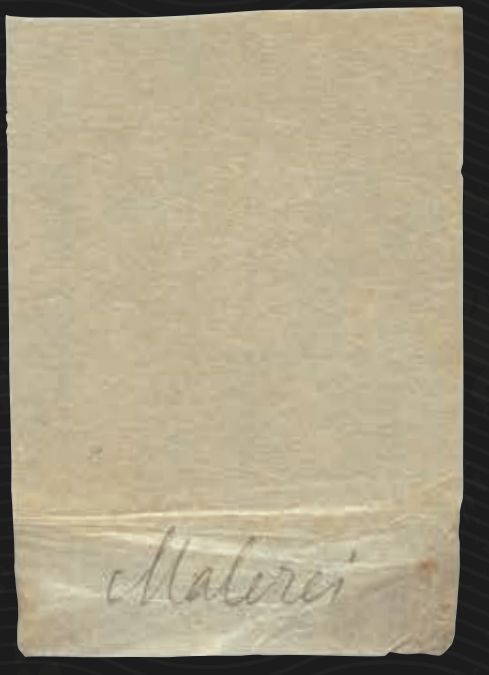
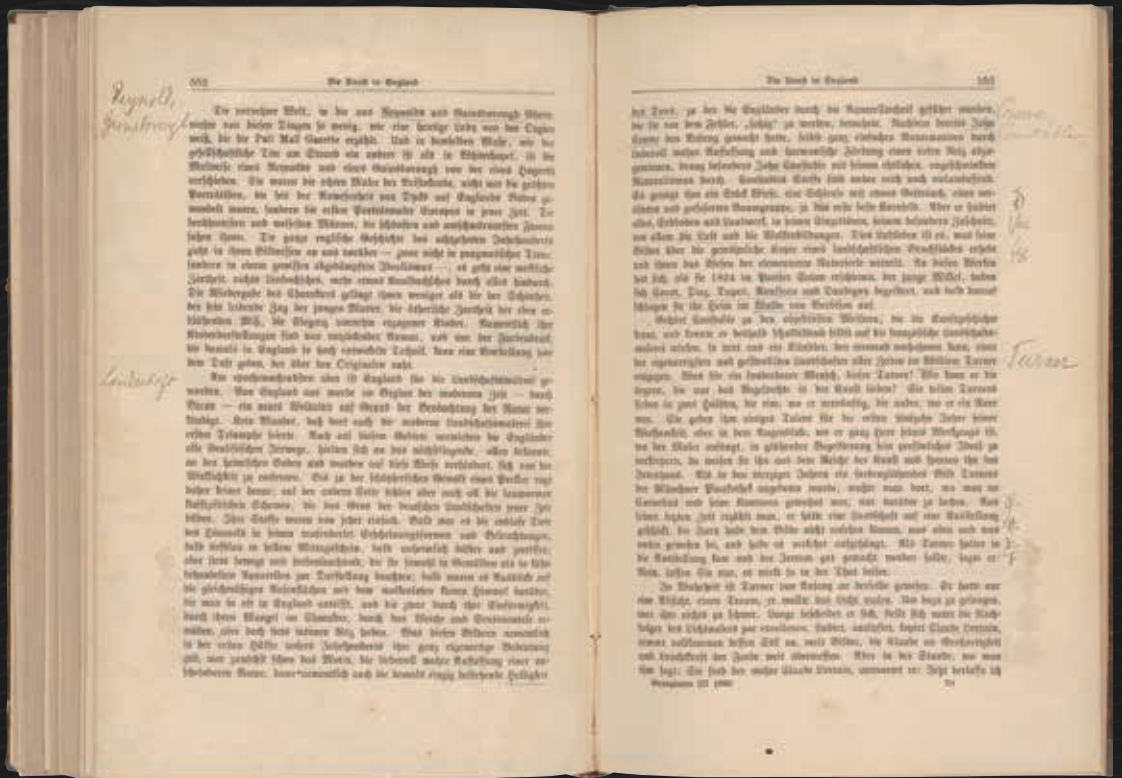
単に医者であり、かつ文学者であったというだけでなく、いわゆる文理の隔てを設けず和漢洋の多彩な方面に通じ、それを教養として囊中におさめた、まさに大都たる鷗外の知の全貌は、いまだ鷗外文庫という迷宮のなかに埋れている。そこに光をあてることは、狭隘な知識と視野の拘束を自覚的に乗越えてゆくための、たしかな灯標となるだろう。100年の時を経て、鷗外文庫はなお、次の100年の知を導き示す指針であり続けているのである。

※鷗外の新出草稿(資料Ⅰ)および*Die Grenzboten*(資料Ⅱ)の詳細については、令和5年1月刊行予定の『比較文学研究』第108号に掲載決定済みの、出口智之・鶴田奈月・ディマルコルクレツィア「〔新出〕ガブリエーレ・ロセッティのダンテ受容に関する森鷗外草稿 翻印と解題」を参照されたい。



I. ガブリエーレ・ロセッティのダンテ受容に関する草稿 (仮題)

総合図書館書庫で新たに見つかった洋雑誌、*Die Grenzboten* 第49巻3号 (1890年第3期) に挟まれていた未完の草稿。19世紀のイタリア統一運動期にナポリを逃れ、英国に渡ったガブリエーレ・ロセッティ (Gabriele Pasquale Giuseppe Rossetti, 1783-1854) が、ダンテ・アリギエーリ (Dante Alighieri, 1265-1321) らの文学を論じた著書にまつわる逸話を記す。中絶部分のあとは、長子で画家・詩人のダンテ・ゲイブリエル・ロセッティ (Dante Gabriel Rossetti, 1828-82) に言及する予定だったと見られる。その一方、鷗外が明治30~31 (1897-98) 年に東京美術学校で講じた「西洋美術史」において、ダンテ・ロセッティとあわせて父ロセッティの生涯も紹介していることから、この講義との関連で書かれたと推定できる。これが講義ノートの未定稿だったのか、それとも講義準備中に見出した故事に興味を抱き、作品への発展を視野に入れてまとめた草稿だったのかなど、詳細な執筆目的は不明だが、歴史把握のなかで関心を持った人物をクローズアップし、そのドラマを文章に綴ってゆくという、鷗外文学の始原をよく示している。



II. Die Grenzboten : Zeitschrift für Politik und Literatur

総合図書館書庫で新たに見つかった洋雑誌。ライプツィヒで刊行されていた週刊誌で、政治を中心に経済、歴史、美術、音楽、文学などの論説を掲載する、硬派な雑誌であった。鷗外の所蔵は48・49巻（1889-90年）の各4号計8冊。週刊ながら年に4号なのは、1年を4期にわけて価格なども設定する方針をとっていたためで、鷗外文庫本も4半期ごとに合冊された形である。8冊すべてに少なからぬ自筆書入れがあり、加えて新出草稿がはさまっていた49巻3号には、自筆と思われる鉛筆のメモが記された葉12葉も挿入されていて、熱心な読書の形跡がうかがえる。当該号に掲載されたR. Muther, 'Die Kunst in England'は、草稿の内容と関わりのある「西洋美術史」講義の典拠文献の1つである。草稿に記されるガブリエーレ・ロセッティにまつわる逸話自体は、どの号の記事にも確認できていないが、今後書入れや様々な記事の内容を詳細に調査すれば、何らかの作品の典拠・情報源であることが判明する可能性は十分にあるだろう。

章

1

医学生鷗外

森鷗外（本名森林太郎）は石見国（現・島根県）津和野に生まれ、幼い頃からオランダ語と儒学を学んでいた。上京後の明治6（1873）年、官立第一大学区医学校（後の東京大学医学部）の募集年齢が14歳以上17歳以下だったため、数え12歳だった鷗外は14歳と年齢を偽って応募し、予科生として入学。2年後に本科へ進み、明治14（1881）年に東京大学医学部を卒業した。同年12月に陸軍に入り、明治17（1884）年に陸軍省派遣留学生として、プロイセンの陸軍医事制度の調査と衛生学研修のためにドイツに渡った。

この章では鷗外の東大医学生時代とドイツ留学時代の資料を紹介する。

鷗外は大学で優秀な成績を収めていたが、さりとてドイツ医学一辺倒な生活を送っていたわけではなかった。鷗外文庫には若年時の書入れがある資料や、留学生時代に求めた資料が多数所蔵されている。それらを眺めていくと、若き頃の鷗外の、ドイツ医学の勉強をしながらも、伝統的な漢方医学を学び続け、儒学の書を読みふけり、また多くの文学に親しんでいた姿が浮かび上がってくる。

說也。○賜圭瓦反暴蒲十反

四月秀麥。五月鳴蜩。八月其穫。十月隕穠。不榮而實曰秀。麥也。蜩蟬也。穫禾可獲也。隕墜也。穠也。四月王黃秀麥。其是于秀麥也。鳴蜩也。獲禾也。隕穠也。四者皆物成而將寒之候物。成自秀麥始。

○華於通反。蟬徒影反。獲戶郭反。一之曰于貉。取彼狐狸為公。子裘。傳十。貉謂取狐狸皮也。狐狸之厚以居。孟冬太子始裘。貉云于貉往。貉給以自為裘也。狐狸以共。韓者言此者。時寒宜助女功。○貉戶各反。二之曰其同。載績武公。言私其緘。獻新

干公。傳績。績功事也。豕一歲曰豨。三歲曰豮。大獸公之。小獸私之。豮云其同者。君臣及民因習兵俱出田也。不用仲冬亦

五月斯螽動股。六月莎雞振羽。七月在野。八月在宇。九月在戶。十

長孫曰在野。三在宇。又不可。或在六。在戶。入社下。是時。蟬也。

月蟋蟀入我牀下。傳斯螽。蟋蟀也。莎雞。羽成而振翅之。箋云。自此三物之如此者。將寒有漸。非卒來也。益音。穹窒。熏鼠塞向

墀戶。傳穹。穹窒塞也。向。北也。墀。塗也。庶人。單戶。墀。我婦子。曰為改歲。入此室處。箋云。曰為改歲者。歲終而一之日。齊祭戶之室而居之至此而女功止。○曰為于偽反。

六月食鬱及薺。七月亨葵及葷。八月剥棗。十月穫稻。為此春酒。以

介眉壽。傳鬱。檮屬。莫。薺。葵也。剝。擊也。春酒。醱也。眉壽。豪也。介。眉壽也。箋云。介。助也。既以鬱薺及葵助男功。又獲稻而釀酒。以助其養老之具。是謂幽雅。○葵。於六反。亨。普

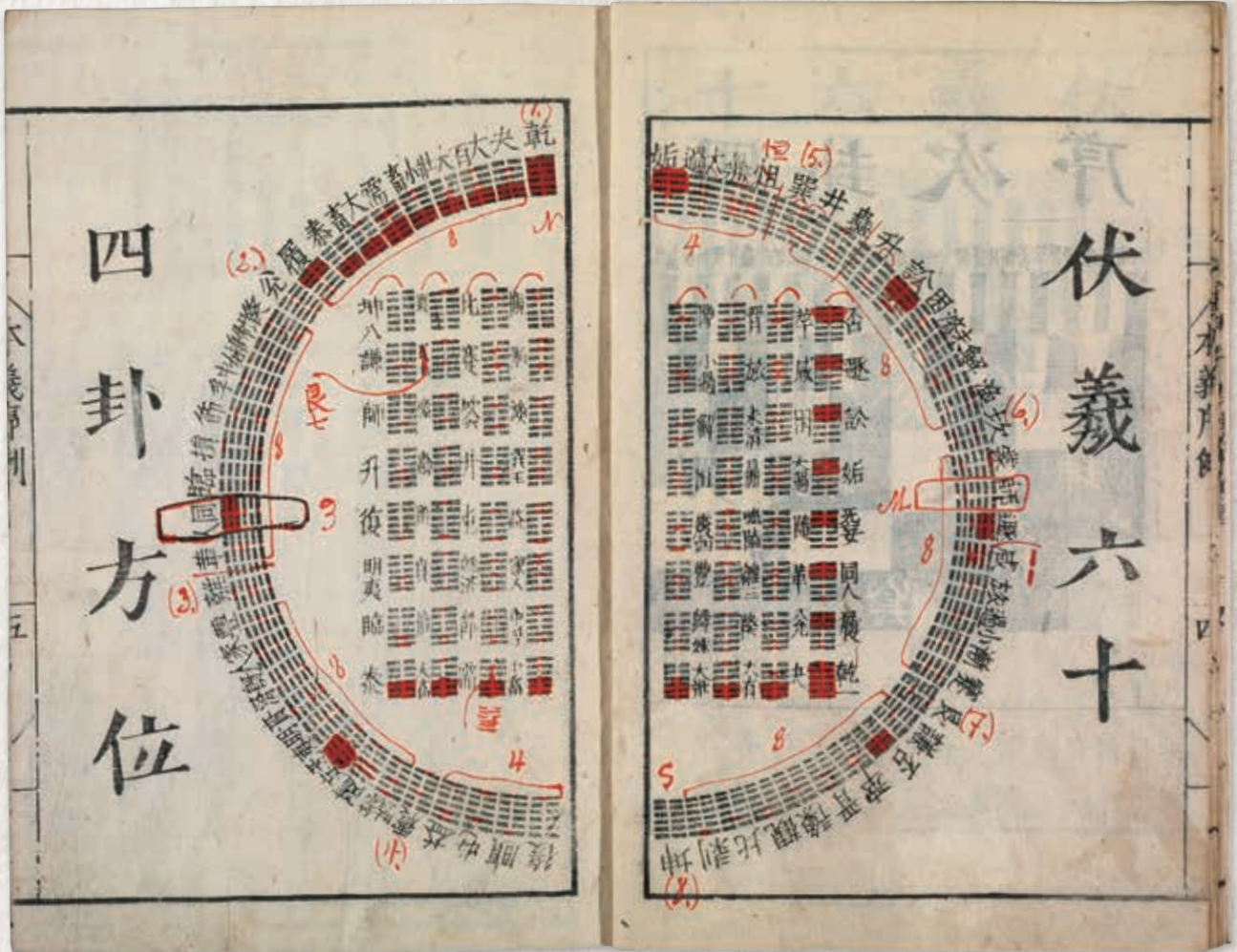
壺。九月叔苴。采荼薪樗。食我農夫。傳壺。楓也。叔。拾也。麻。于也。苴。惡木也。箋云。瓜。瓠之音。麻。

傳斯螽。蟋蟀也。莎雞。羽成而振翅之。箋云。自此三物之如此者。將寒有漸。非卒來也。益音。穹窒。熏鼠塞向墀戶。傳穹。穹窒塞也。向。北也。墀。塗也。庶人。單戶。墀。我婦子。曰為改歲。入此室處。箋云。曰為改歲者。歲終而一之日。齊祭戶之室而居之至此而女功止。○曰為于偽反。

1-1 詩經

(漢) 毛公傳；(漢) 鄭氏箋；(明) 金蟠訂；(日本) 井通熙 [校] 延享4 (1747) 年 [刊]

儒学の基本テキストである「五経」の一つ。鷗外自筆の欄外への注記は、明治14 (1881) 年ころの書入れと推定され、近世日本の儒者の著述を引用し、その解釈を参考にしながら経書に親しんでいたことがうかがえる。(合山、一部改編)



1-2
周易

(宋) 朱熹本義；(日本) 林子〔點〕 延寶2 (1674) 年 [印]

朱子による、「五経」の一つである『易経』の注釈書。鷗外は留学以前に読んだと考えられる。全丁にわたって朱墨による圈点や書入れがあり、青年鷗外の「易」に対する強い関心がうかがえる。(合山・出口、一部改編)



1-3 蘭学事始

杉田玄白著 明治2 (1869) 年

文化12 (1815) 年成立。江戸中期の蘭方医である杉田玄白が、蘭学創始の事情と蘭学発達の跡をまとめた回想録。『解体新書』翻訳の苦心談が著名である。写本のみで伝わっていたところ、明治2 (1869) 年に福沢諭吉が『蘭学事始』の書名で刊行した。「橋井堂」、「參木之舎」は若年時に用いた蔵書印。



1-4 傷寒論文字攷

伊藤馨著；島川三折，中島忠順同校
嘉永4 (1851) 年

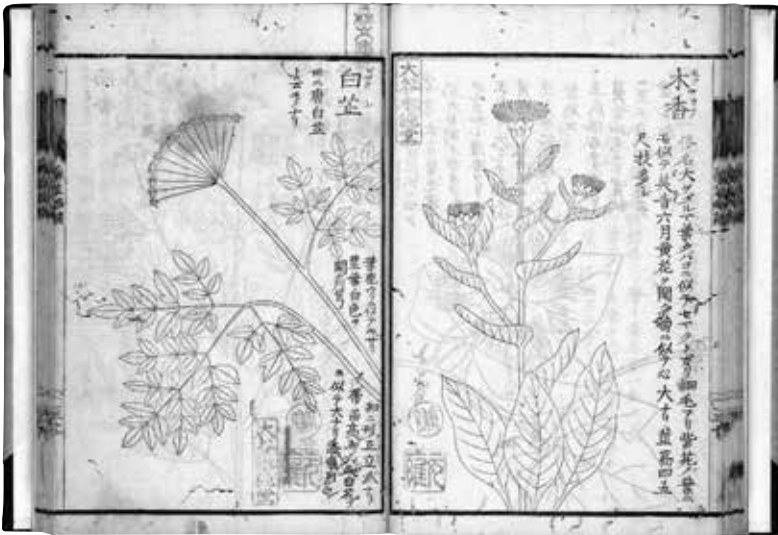
『傷寒論』は漢方医学の原典であり、主に急性熱病の症状と治療法が詳述されている。そこから85則を選び、経史などを引いて考証している。巻末に「明治十年五月十二日贖之 東京大学医学部 森林太郎」の識語があり、東大医学部在学中の購入と知られる。



1-5 大倭本草

貝原益軒編録 寶暦11 (1761) 年

『本草綱目』に準拠しながらも独自の分類を立て、内外の動植物について誌した百科事典的な書。医学生時代の入手と見られ、西洋医学を学びながら、父祖の業であった漢方医学にも興味を持つ、鷗外の二重性を示している。若年時に加え、後年の書入れも見られる。(梅山、一部改編)

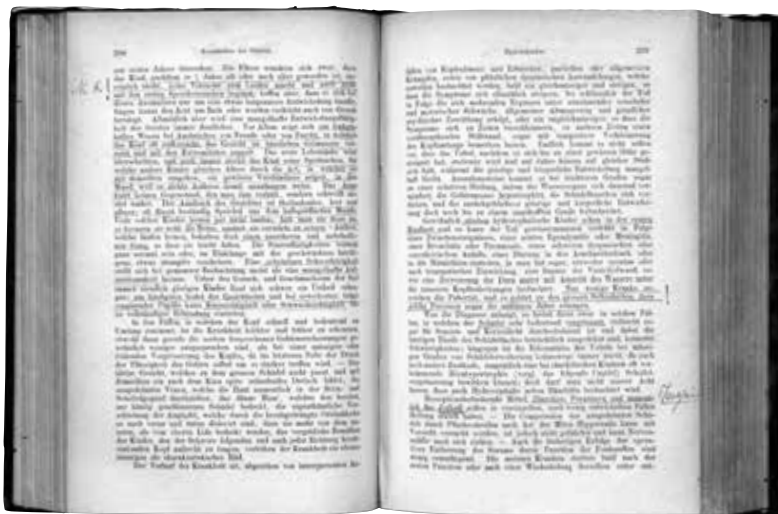


1-6 薬草畧譜

却麿窩主叟著 寛政5 (1793) 年

薬草図譜。漢名の見出しと、俗名や形態、開花時期について解説があるが、薬効や使用法についての説明はない。

ドイツ医学を学ぶかたわらで漢方医学も学んだ鷗外は、教室でその知識を主張して教授の反感を買い、卒業時の成績を落す一因になったと伝わる。



1-7

Felix von Niemeyer's Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie mit besonderer Rücksicht auf Physiologie und pathologische Anatomie

neu bearbeitet von Eug. Seitz
1877-1879 (明治10-12) 年

ニューマイヤー『病理学と治療』。当時の東大医学部の授業はドイツ人の教員により、ドイツ語で教えられていた。下線が多数引かれており、書入れはドイツ語がほとんどだが、漢文もある。



1-8 辨名

荻生徂徠著 寛政元 (1789) 年 [刊]

辨道

荻生徂徠著 享保2 (1717) 年 [刊]

江戸時代の大儒・荻生徂徠の著述。『辨名』と『辨道』をあわせて「二弁」と称される。「明治十二年八月四日牽舟居士」との自筆識語から、数え18歳での閲読とわかる。当時、医学部本科生であった鷗外は、漢方医学のみならず、広く漢学にも興味を示していたのだった。(合山、一部改編)

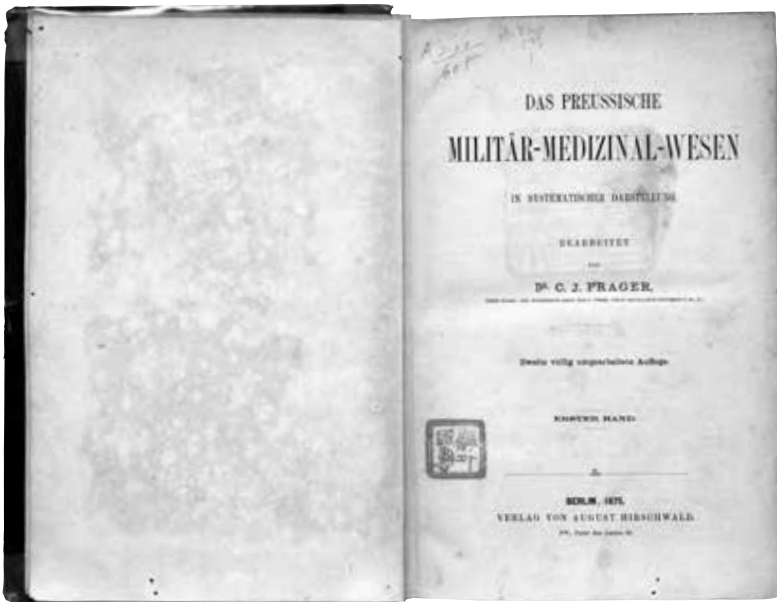


1-9

**東京帝國大學醫科大學並同學
醫學部卒業生氏名録**

金子常蔵編 大正3 (1914) 年

鷗外 (森林太郎) は明治14 (1881) 年に、東京大学医学部を席次8番で卒業した。主席ではなく文部省官費での洋行の道は潰えたが、後に陸軍の軍医となりドイツへ留学することになる。



1-10

**Das preussische Militär-
Medizinal-Wesen in
systematischer
Darstellung**

bearb. von C.J. Prager 1875 (明治8) 年

プラーゲル『プロイセン陸軍衛生制度書』。明治14 (1881) 年に陸軍入りし、プロイセンの陸軍衛生制度調査に従事した鷗外が、約10ヶ月で『医政全書稿本』12巻として抄訳摘録した文献。この評価が明治17 (1884) 年のドイツ留学につながった。



1-11

**Kurzgefassstes lateinisch-
deutsches und deutsch-
lateinisches Handwörterbuch :
mit einem Verzechnisse
lateinischer Abbraviaturen
und geographischer Namen**

neu bearbeitet von I.G. Volbeding
1872 (明治5) 年

ラテン語-ドイツ語の辞書。鷗外はラテン語も習得しており、「キタ・セクスアリス」や「カズイスチカ」といった、作品のタイトルとしても使用している。



1-12

頼豪阿闍梨性鼠傳引用群書要語

[森鷗外自筆] [明治期]

鷗外による若い頃の読書ノートと考えられる。曲亭（滝沢）馬琴の読本「頼豪阿闍梨性鼠伝」より、「猫」「鼠」に関する言葉を中心に引用。『本草綱目』などを元に語注を加えている。（神田、一部改編）



1-13

絲櫻春蝶奇縁

滝沢馬琴著 明治19 (1886) 年

曲亭（滝沢）馬琴の読本で、義太夫節の人物に浄瑠璃の趣向と文体を取入れた作品。序の頁にある鷗外の所蔵印「医学士森林太郎図書之記」は、医学部卒業後に製作され、購入時期を知る手がかりになる。鷗外文庫に多数の押印がある。目次は弟、篤次郎（三木竹二）の筆か。



1-14

松染情史 秋七草

滝沢馬琴著 明治16 (1883) 年

曲亭（滝沢）馬琴の読本。扉は鷗外または篤次郎の自作で、「橋北 橋井堂」とは、父が千住大橋北側の千住にて営んだ医院、「穉」は「秋」の異体字である。鷗外は、おなじく東大医学部に通い、後年には劇評家となる弟の篤次郎とともに、これらの馬琴作品を熱心に読んだ。

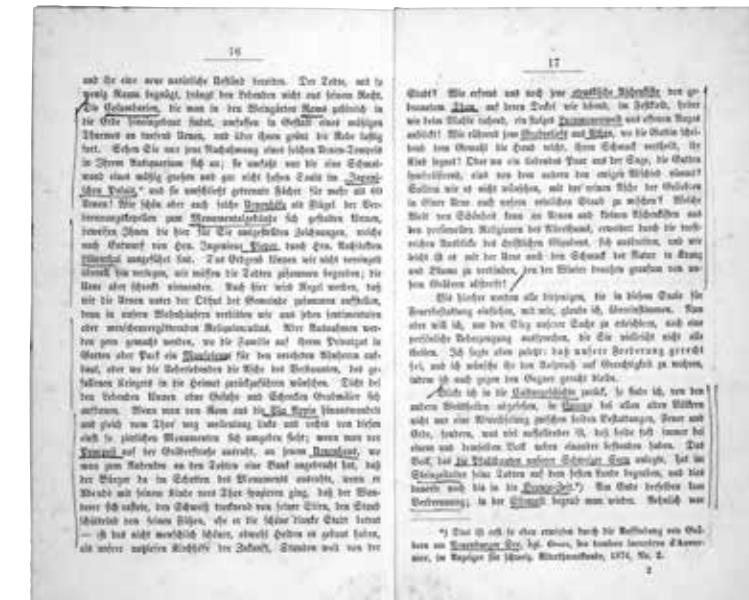


1-15

小説神髓

坪内逍遙述 明治18 (1885) 年緒言

坪内逍遙による日本最初の体系的小説論。赤色鉛筆の書入れが多く、有名な一説「小説の主脳は人情なり、世態風俗これに次ぐ」の部分にも印が付されている。鷗外留学中の出版で、小堀桂一郎は「或いはドイツ宛に送られてゐたかもしれない」（小堀桂一郎『森鷗外—日本はまだ普請中だ』）と推測している。（神田、一部改編）

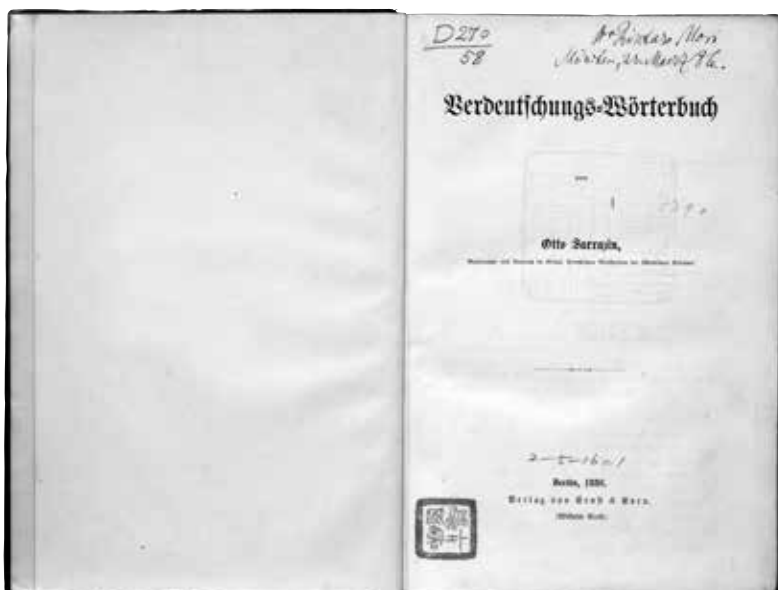


1-16

Für die Feuerbestattung

von Gottfried Kinkel 1877 (明治10) 年

キンケル『火葬について』。陸軍軍医としてドイツに留学した鷗外は、軍の意向を受けて衛生学を研修した。自筆識語から、ミュンヘン滞在中に軍医ヴェーバーの薦めにより購入したとみられる。鉛筆の下線が多く、熟読したものと推測される。（河野、一部改編）



1-17

Verdeutschungs-Wörterbuch

von Vrrazin Otto 1886 (明治19) 年

1886年出版のドイツ語辞書。「Rintaro Mori München, 23. Maerz 86」と鷗外の自筆で記されている。ドイツ留学中の1886 (明治19) 年にミュンヘンで新刊として手に入れたものか。

職務に向きあう

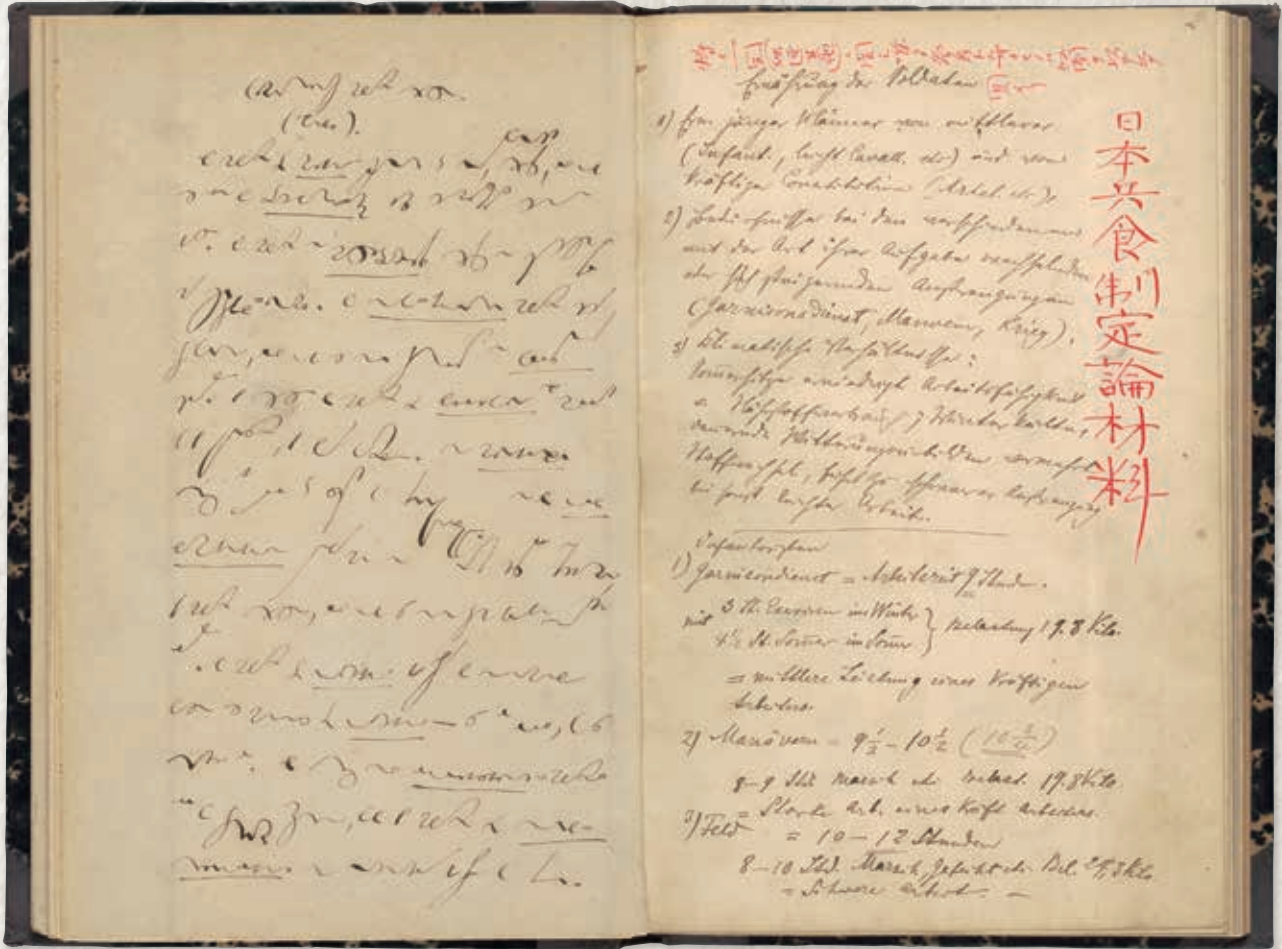
この章では、鷗外森林太郎の文学以外の活動、すなわち陸軍や宮内省等における、鷗外の「公務」上の仕事がうかがえる資料を紹介する。

鷗外は長く陸軍の軍医をつとめ、最高位の医務局長・軍医総監で退役した。陸軍は日清・日露戦争中、脚気で多くの戦病者・死者を出した。鷗外は陸軍における衛生行政の中心人物として、その対応について論じられることも多い。

一方で、軍医として気を配るべきは脚気だけではなく、感染症など多岐にわたる。感染症予防に関する蔵書や、衛生学者として東京の都市計画に関与していたことを示す資料、あるいは温泉や風土病に関する資料など、多面的な関心のあり様がその蔵書からうかがえる。

また、留学時代と小倉時代にクラウゼヴィッツの「戦争論」の講義をして翻訳を残したほか、海外の情勢や地誌に関する蔵書も多く、これらは帝国軍人としての鷗外の視界がどのようなものであったのかを示すものと言えよう。

晩年には文化行政の分野で、文学者としての鷗外に連なる仕事に関わった。仮名遣い問題では、歴史的仮名遣いを支持し、その後の文部行政に大きな影響を与えた。大正6（1917）年には宮内省皇室博物館総長兼図書頭となり、「寮館事略」等に伺われるような勤勉さで、死の直前までその任に当たった。

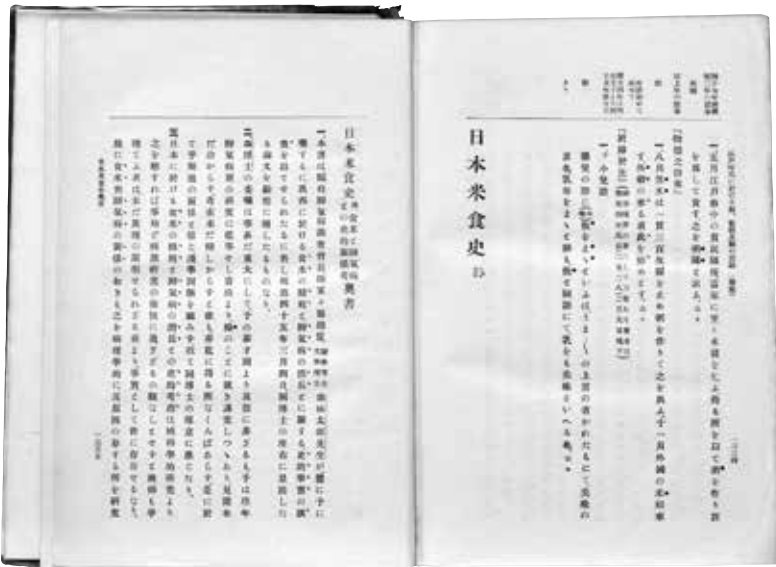


2-1

Notizen, 1884-86

Ōgai Mori

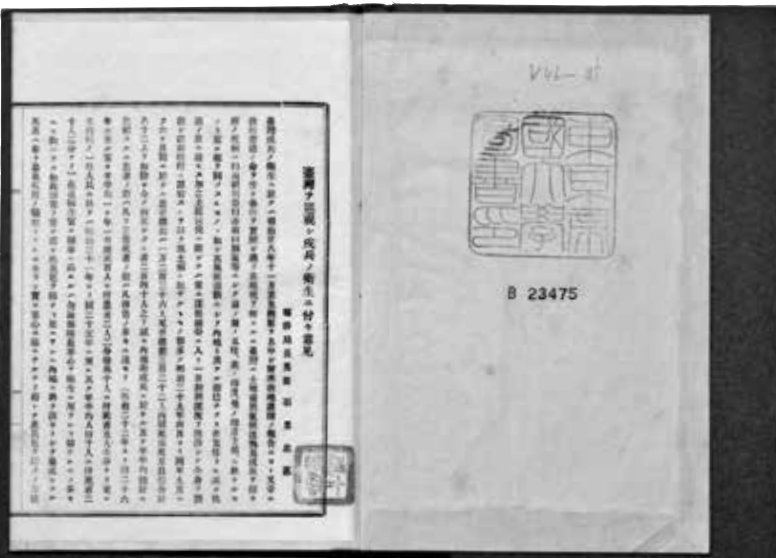
ドイツ留学時代の鷗外の研究ノート。ほとんどドイツ語で書かれており、主として日本兵食料研究に従事していた当時の実験データを記録したもの。同様のノートが文京区立森鷗外記念館に数冊所蔵されており、本来は一連のものであった可能性もある。1983年の「鷗外文庫展」以来の出版で、ほとんど研究が進んでおらず、今後の研究が期待される。



2-2 日本米食史

岡崎桂一郎著 大正2 (1913) 年

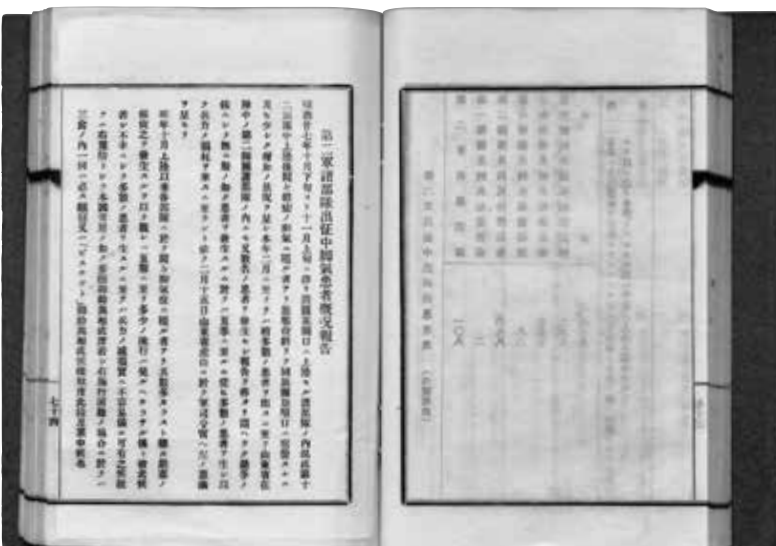
鷗外が漢文体で「私は臨時の脚気病調査会長になって(中略)米の精粗と脚気に因果関係があるのを知った」(口語訳は志田信男『鷗外は何故袴をはいて死んだのか』より)という内容の序文を寄せている。また、奥書に鷗外が調査を委嘱し、多大な好意と尽力を寄せた旨の記述がある。



2-3 臺灣ヲ巡視シ戍兵ノ衛生ニ付キ意見

石黒忠憲 [述] 明治28 (1895) 年

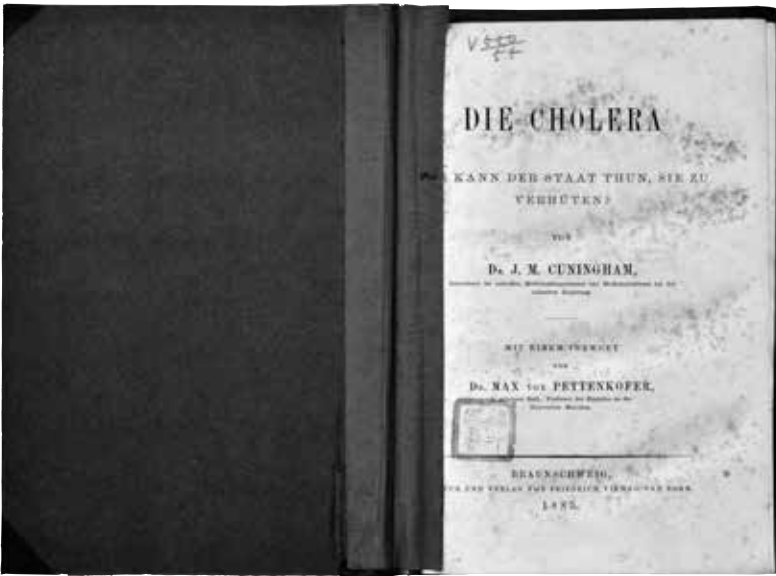
日清戦争後の台湾平定で、鷗外の上官であった石黒忠憲が台湾視察後に出した報告書。鷗外も石黒の命で、大陸から直接台湾に赴任した。石黒は白米至上主義で、鷗外も同調することが多かったが、前年の意見書と異なり、白米飯堅持の姿勢が薄れているようである。



2-4 明治二十七年、二十八年役 第二軍軍醫部報告

第二軍軍医部 [編] 明治28 (1895) 年緒言

鷗外は明治27-28 (1894-95) 年の日清戦争において、第2軍兵站軍医部長として戦地に赴いた。この報告書では、負傷者数、脚気・コレラ等の患者数のほか、出征中の第2軍の衛生状況が詳細に報告されている。



2-5

Die Cholera : Was kann der Staat thun, sie zu verhüten?

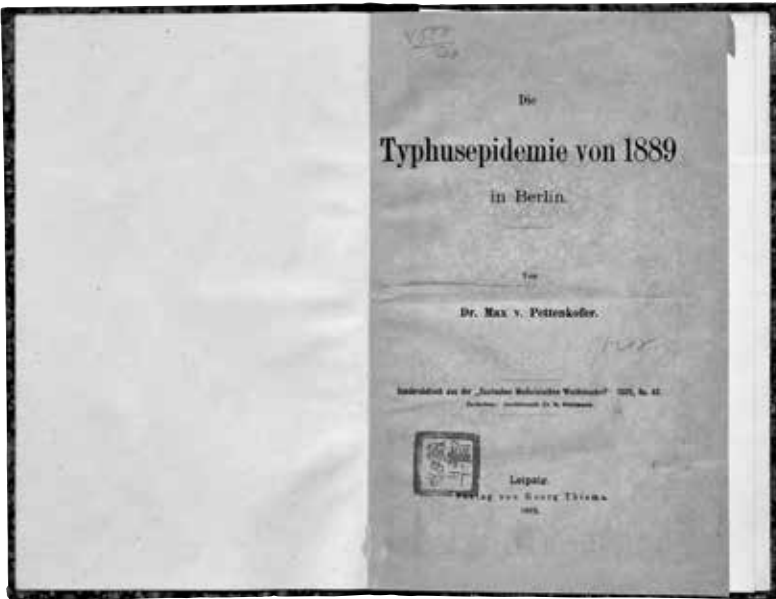
von J.M. Cuningham ; mit einem vorwort von Max von Pettenkofer 1885 (明治18) 年

2-6

Die Typhusepidemie von 1889 in Berlin

von Max v. Pettenkofer 1889 (明治22) 年

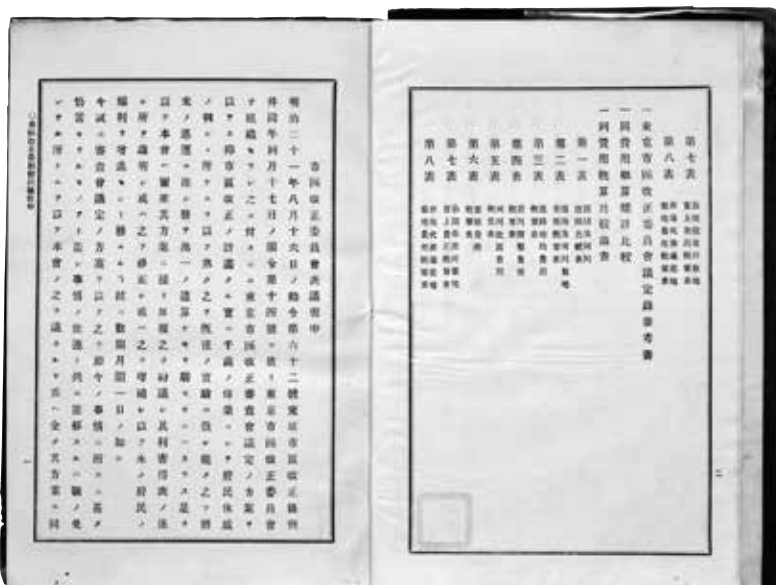
コレラやチフスに関するドイツの医学書。著者のPettenkoferはドイツ留学中に鷗外が師事したミュンヘン大学の衛生学者。明治41（1908）年、当時軍医総監だった鷗外は、ワクチンによる予防接種（腸チフス）を陸軍で初めて正式導入した。



2-7

東京市区改正委員會議定顛末

明治21（1888）年の東京市区改正条例で設置された委員会の決議書。鷗外はこの委員会の建築条例調査委員会専門委員だった。公衆衛生学の観点から複数の論文を発表して、都市計画に関する具体的な提案を行っている。





2-8

日本鑛泉ラヂウムエマナチオン含有量表

森林太郎 [編] 大正4 (1915) 年序

2-9

日本住血吸蟲病豫防法

藤浪鑑, 末安吉雄著 大正8 (1919) 年

鷗外は軍医であると同時に衛生行政官であり、医学・衛生学分野の様々な領域に目配りしていた。『日本鑛泉ラヂウムエマナチオン含有量表』は、鷗外を団長とする陸軍軍医団が全国主要温泉のラドン含有量調査を行い、各道府県ごとに結果をまとめたものである。『日本住血吸蟲病豫防法』は、寄生虫によって起こる日本住血吸虫症に関する予防法がまとめられた雑誌記事の別刷で、数年間にわたる実験結果が多数まとめられている。これらの資料からは、鷗外が調査や実験結果をもとにした理論を重視していたことがうかがえる。



2-10

大戦學理

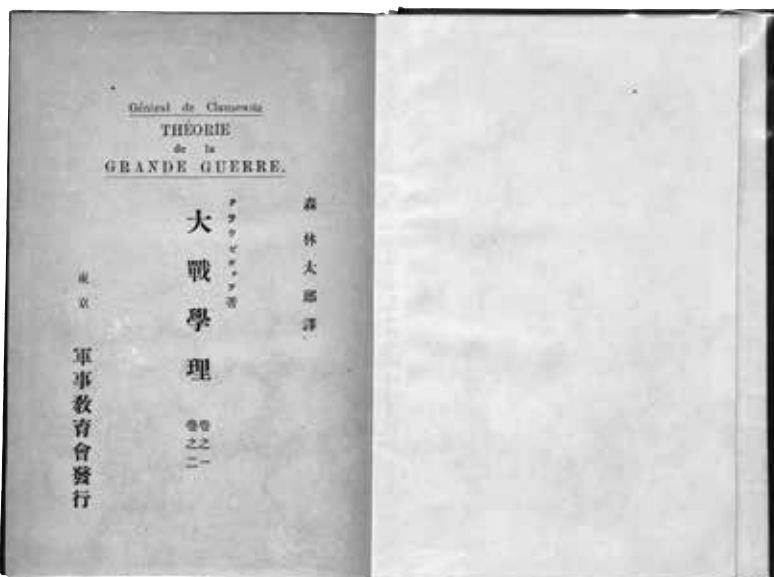
クラウゼヴィッツ著；陸軍士官學校譯
明治34-36 (1901-1903) 年

2-11

Vom Kriege : hinterlassenes Werk des Generals Carl von Clausewitz

1832-1834 (天保2-天保5) 年

鷗外は留学中にクラウゼヴィッツ「戦争論」を知り、高く評価して、同じくベルリンに留学していた後の陸軍中將・田村怡与造にこれを講じた。日清戦争従軍後、小倉時代には第12師団の将校のために毎週講義を行い、翻訳に取り組んだ。原著へのペンの書き入れは留学中の読書の進捗を表し、鉛筆は抄訳のためのメモと思われる。抄訳『大戦学理』は明治36 (1903) 年に出版された。(河野・一部改編)





2-12

臺灣誌

[參謀本部編纂課編輯] 明治28 (1895) 年

台湾島統治資料。鷗外は日清戦争終結直後の明治28 (1895) 年5月、台湾赴任を命じられ、台湾総督府陸軍局軍医部長に就任している。同行した近衛師団は、現地住民の激しい抵抗にあい、苦戦することになった。鷗外は戦闘終結前の9月に帰国している。



2-13

朝鮮鐵道線路案内

朝鮮總督府鐵道局 [編] 明治44 (1911) 年

2-14

樺太殖民政策

谷口英三郎著 大正3 (1914) 年

鷗外は日清戦争時に釜山で1ヶ月ほど過ごし、「中路兵站軍医部別報」を書いている。樺太に赴任したことはないものの、陸軍軍医総監・陸軍省医務局長就任後に出版されたこれらの資料が鷗外文庫に残ることは、外地の統治が意識に入っていたことを物語っている。



2-15

支那印象記

小林愛雄著 明治44 (1911) 年

著者は早稲田実業学校（現・早稲田実業高校）校長で、作詞家・脚本家としてオペラ・オペレッタの普及に尽力した。本書は明治41（1908）年の大陸旅行に際した印象記で、鷗外の序を持つ。日露戦争を背景とする「鼠坂」（明治45（1912）年）との関連も指摘されている。

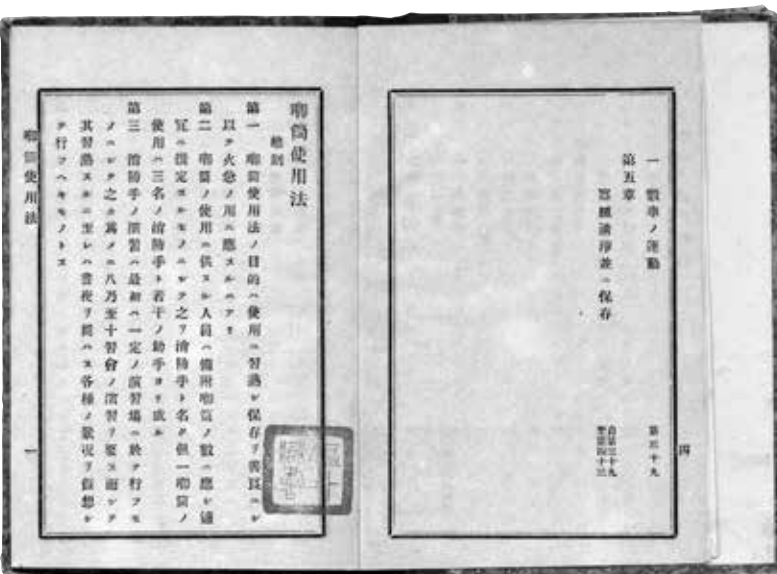


2-16

日清對譯戰陣要語

明治37 (1904) 年例言

日露戦争に併せて急遽刊行されたと思われる、戦地用中国語会話集。北京語にフリガナが振られている。鷗外が実際に使用したかは定かではない。

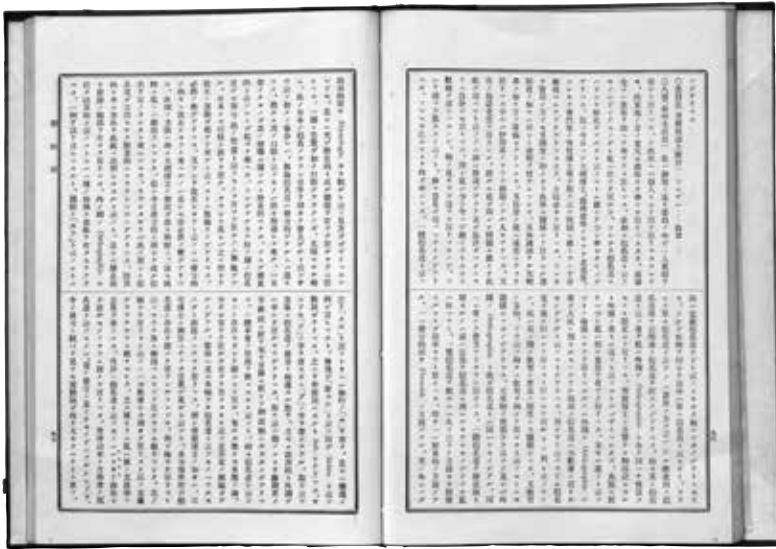


2-17

唧筒使用法

陸軍省編 明治27 (1894) 年

明治27（1894）年に陸軍省が定めた「ポンプ使用法」別冊。ポンプの構造から使用方法まで図解入りで説明している。

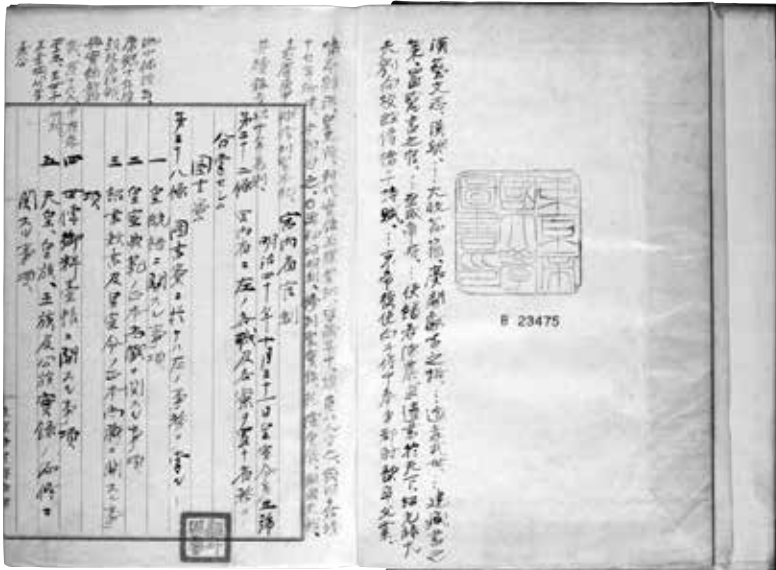


2-18

臨時假名遣調査委員會議事速記録

文部大臣官房圖書課 [編] 明治42 (1909) 年

明治41 (1908) 年に委員に任命された、臨時仮名遣調査委員会の速記録。6月26日の委員会で、鷗外は歴史的仮名遣を守る立場から、「私ハ御覽ノ通り委員ノ中デー人軍服ヲ着シテ居リマス」という印象的な発言で始まる長文の意見（「假名遣意見」）を述べている。



2-19

寮館事略

「寮」「館」は宮内省図書寮・帝室博物館を指し、規定・名簿など事務資料を綴じたもの。鷗外は大正6 (1917) 年12月から死去まで、帝室博物館総長兼図書頭をつとめた。一部鷗外自筆も含み、「東京帝室博物館」「宮内省」の罫紙が使用されている。



2-20

正倉院楽器の調査報告 (帝室博物館學報；第2冊)

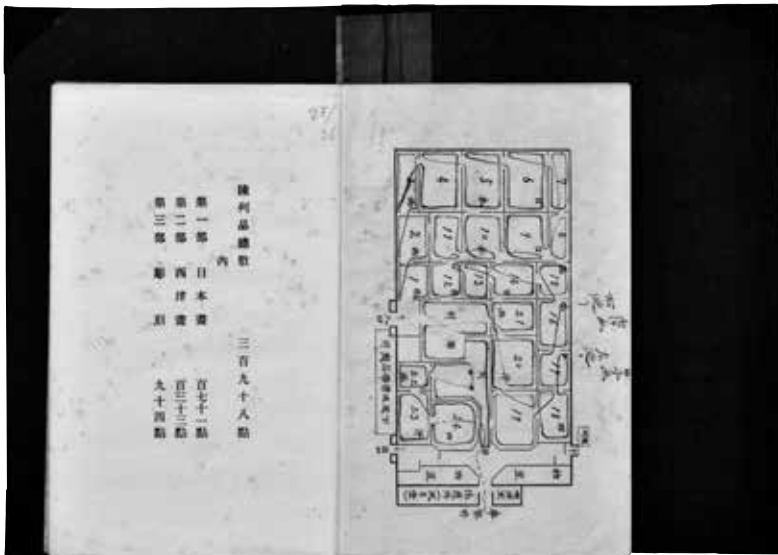
上眞行 [ほか] 著 大正10 (1921) 年

大正9 (1920) 年11月に行われた、宮内省の上眞行らによる正倉院所蔵古楽器の調査報告。帝室博物館総長だった鷗外が創刊した、『帝室博物館学報』の第2冊にあたる。鷗外はほかに、総長として毎年立会った正倉院曝涼の拝観資格を拡大したことでも知られる。

2-21

帝國美術院第三回美術展覽會 陳列品目錄

明治40（1907）年創設の文展が改組され、大正8（1919）年に帝展となった第3回の陳列品目錄。鷗外は帝國美術院初代院長をつとめ、第1回から上野公園の会場に足を運んでおり、本書にも実際の見聞によると思われる書入れが施されている。



知識への渴望

鷗外は40歳前後にあたる明治30-40年代に、『塵冢』と題された雑記帳を作成している(資料3-1)。ページを繰っていくと、簡単な見出しと共に記されるメモ書きの、その内容の幅広さに驚かされる。「歐米梵學の梗槩」「馬蹄葉」「もうせん苔」「雪中行軍」「音の高低」……。 「本職」としていた軍事、医療関係のみならず、宗教、博物誌、園芸、地誌など多岐に亘る内容が次々と並び、流麗な横文字の筆記体や漢語の語彙で埋め尽くされているページもある。

興味を持った事柄を筆録する形で物事を学び取っていった鷗外は、こうした雑記帳的なノートや写本、手抄本の類を数多く残した。

『塵冢』のような自筆資料から読み取れる鷗外の知のあり様は、彼の蔵書そのものにも表れている。鷗外文庫を少し見渡しただけでも、極めて広範な分野の図書が含まれていることに気付かされる。

そこでこの章では、一見彼の職業や創作活動とは直接的な関わりがないように思われる鷗外の蔵書を紹介する。各種の宗教、建築技法、社会・労働問題、工芸、諸芸など、多様な資料とそこに残る学びの痕跡を通じて、木下杢太郎によって「テエベス百門の大都」と称された、縦横無尽に広がる鷗外の知の宇宙の一端を感じていただければ幸いである。

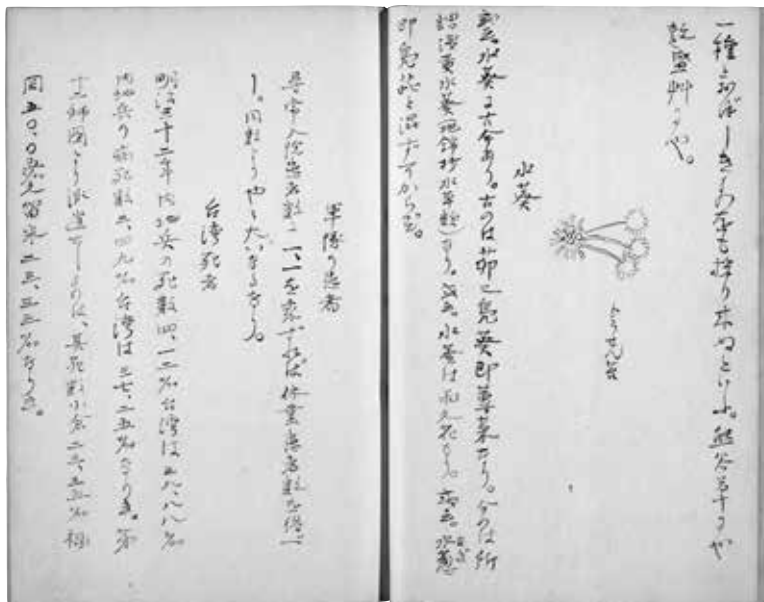


3-22

長禄江戸圖

[森鷗外自筆] 大正4 (1915) 年

鷗外自身が模写した、彩色のほどこされた江戸図である。本図には長禄年間（1457-1460）の年号が冠されているが、実際には近世中後期ころに成立した推測図である。鷗外は江戸時代の武家名鑑である武鑑とともに古地図も多数蒐集していたが、みずから写した地図はきわめて珍しい。（出口、一部改編）



3-1 塵家

[森鷗外自筆]

鷗外自筆による雑記録。執筆時期は明治32（1899）年から明治40（1907）年ごろと推測される。内容の多くは覚え書き程度のもので、分野は宗教・博物誌・地誌・軍事・医事・語彙など多岐にわたり、鷗外の関心領域の広さを示している。（多田、一部改編）

3-2 字記捷覧 2巻

(釋) 周觀 [註] 元禄12 (1699) 年 [刊]

(唐釋) 智廣撰『悉曇字記』の注釈本。梵語研究の最古の専著『悉曇字記』は五十音図の成立や字音仮名遣いに大きな影響を与え、その注釈や改編として本書のような日本独自の音韻学研究文献も多数出版された。全篇にわたり傍線や誤植訂正などが多く、鷗外の悉曇学への関心の高さがうかがえる。



3-3 説文易檢

(清) 史恩綿編 民国6 (1917) 年刊

最古の部首別漢字字典である『説文解字』（西暦100年）の検索の便のため、史恩綿が作成した参考書。鷗外蔵書の中には、説文の関係書籍が30余部あって、漢字への興味をうかがわせる。展示箇所（巻八上の13丁）などは、鷗外自筆と思われる補訂である。





3-4

俳諧五子稿

[朝陽館編]

鷗外の随筆「俳句と云ふもの」に
 <秋風や白木の弓に弦張らん 去来
 と云ふ句がひどく気に入つて、こんな句がして見たい
 と思つた。>
 との記述があるが、実際に本書の「落柿舎去来句集」
 の該当の句に朱筆で○が付いている。
 <その後俳句を少しして見たが、かう云ふ向きの句は
 一つも出来たことがない。>
 幅広い興味と知識を持つ鷗外も、思うようにならなかつ
 た分野もあつたようである。



3-5

俳諧手挑灯

明治22 (1889) 年刊

季語など俳諧に用いる語を集めたもの。冒頭に凡例と
 して、連歌俳諧の形式や用語についての詳しい解説が
 あり、指南書として興味深い。



3-6

煎茶訣

(清) 葉雋撰 (日本) 小田誠一郎訓點
 明治12 (1879) 年刊

蔵茶、扱水から茶具まで、煎茶の作法を漢文体で解説
 した書。一部が寛政10 (1798) 年跋刊の『煎茶略説』
 (沢田美成撰) にて和訳され、後世の煎茶及び茶師に
 大きな影響を与えた。鷗外は東大在学中の明治10年
 代より、煎茶の趣味を覚えたことが知られている。



3-7 釋小記續

[森鷗外自筆]

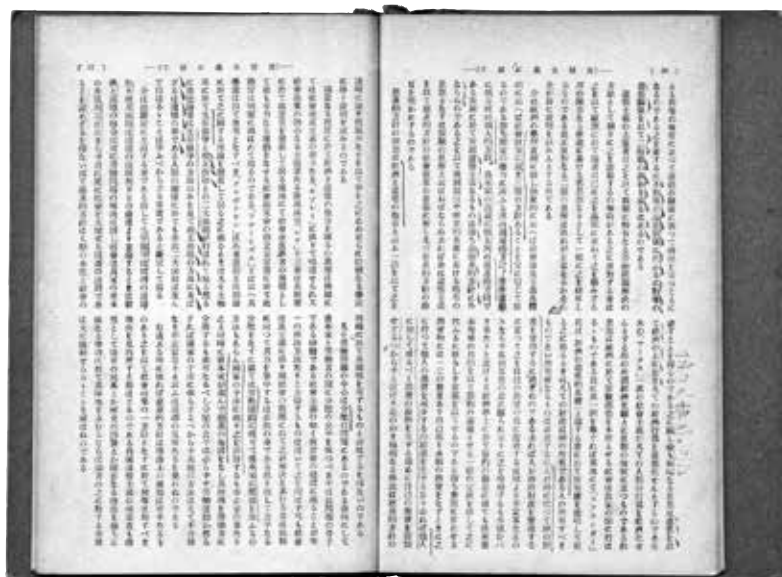
仏教各宗派の所依、始祖、法統などを抄録した『釋小記』と同じく鷗外自筆の読書ノート。村上專精の『日本仏教史綱』から密教各宗の伝来、真宗、禅宗など各宗派の法統図を抄録、又は構成したもの。鷗外の晩年に散見される山加製原稿用紙に書かれている。(神田、一部改編)



3-8 世界宗教一斑

内山正如，瑜伽理門著 明治33（1900）年刊

仏教やキリスト教諸派をはじめ、イスラム教、ヒンドゥー教、ユダヤ教などの多様な宗教教義及び世界各国宗教の現状が紹介されている。一部、鷗外のものと思われる朱筆圈点が施されており、各宗教への関心を示している。



3-9 労働問題批判

社会主義などに関連する雑誌記事を切り抜き合綴した本。末子の類は、鷗外が「新しい思想を弾圧してはいけない。よく勉強してみなければ」と言い、晩年その研究に着手していたことを伝えている（『鷗外の子供たち』）。



3-10

労働問題の現在及将来

堀江歸一著 大正8 (1919) 年刊

3-11

我国資本家階級の発達と資本主義的精神

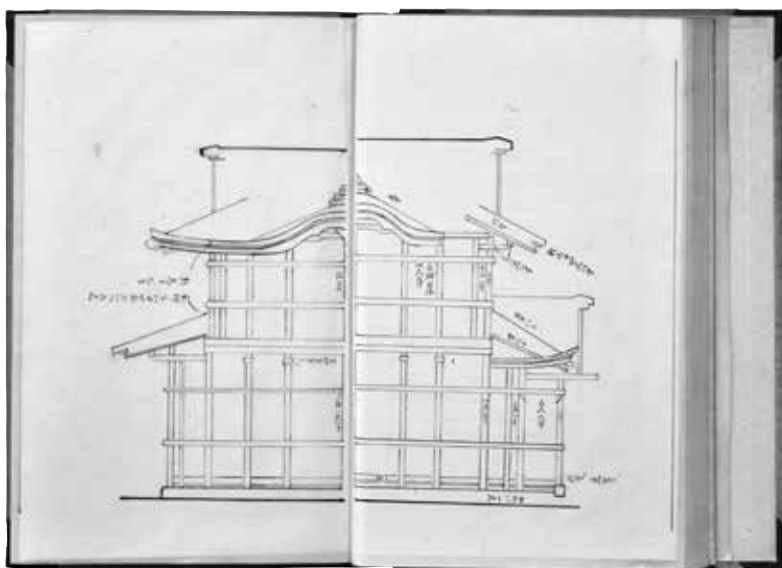
円谷弘著 大正9 (1920) 年刊

3-12

社会改造の原理

ベルドランド・ラッセル著；高橋五郎譯
大正8 (1919) 年刊

社会運動、労働問題についての興味がうかがえる一連の資料。



3-13

大匠手鑑 全

[鈴木重春著]

享保年間に江戸の大工鈴木重春によって編まれた技術書の写本。大工棟梁の格式を示すと考えられた技術を体系化・雛形化した一連の公刊技術書のうちの1点で、鳥居、鐘楼の種別に至るまで豊富な図面入りで解説されている。

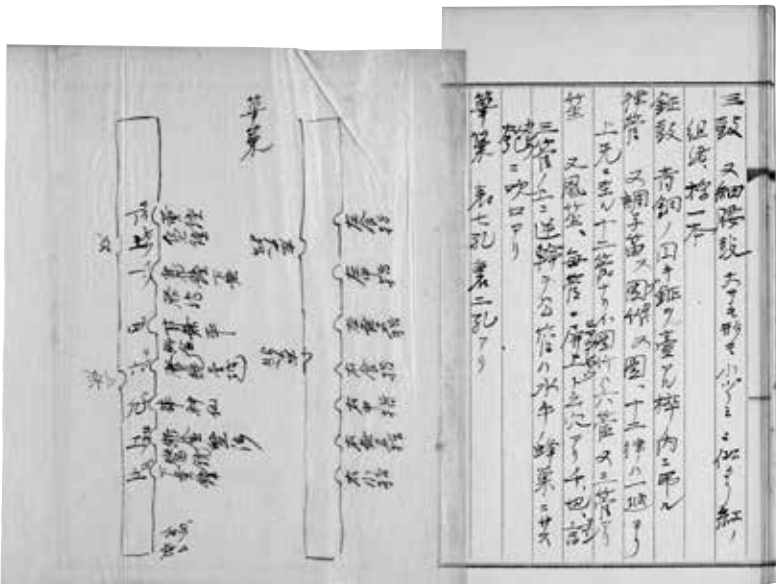


3-14

古刀鍛冶銘尽

弘化5 (1848) 年 [刊]

江戸末期に編まれた刀剣書。各刀工の銘を集め、主に茎の図入りで解説したもの。刀工は主に国ごとにまとめられている。刃文などの特徴を説明してある刀剣もある。



3-15 樂小記續

[森鷗外自筆]

楽器の性質や来歴を抄書したノート。『日本雅樂概辯』、『樂器考』（栗田寛撰）、『歌舞品物』（藤原守中撰）からの抜抄である。高知堂、東京宮田、虎の門鈴木製原稿用紙に書かれており、晩年のものと推定される。（多田、一部改編）



3-16 乗馬運動書

明治23（1890）年刊

乗馬時の服装や騎乗姿勢、鞭の用法から、複数騎で行進する際の動きまで、図面と共に解説されている。鷗外自身、軍医として常に馬に乗っており、軍服姿で愛馬とともに写った写真も残っている。



3-17 日本鳥類圖説

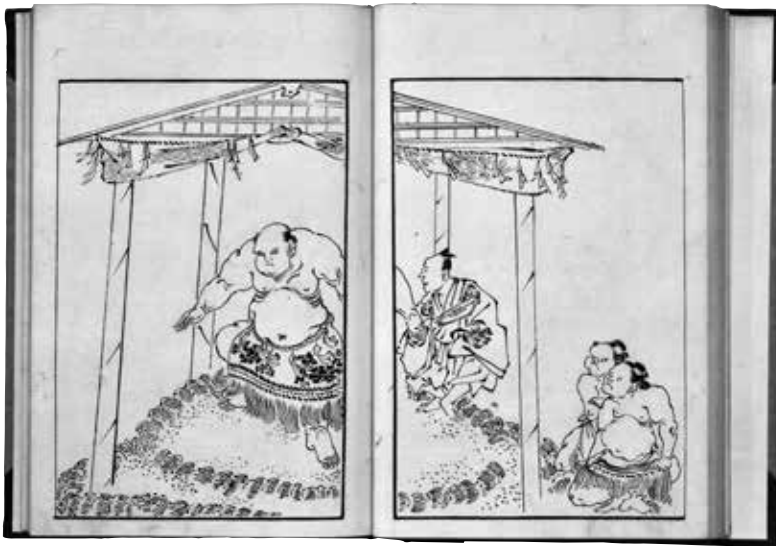
内田清之助著 大正2（1913）年刊

3-18 日本藻類名彙

岡村金太郎著 明治35（1902）年刊

3-19 富士山植物目録

梅村甚太郎著 明治35（1902）年刊

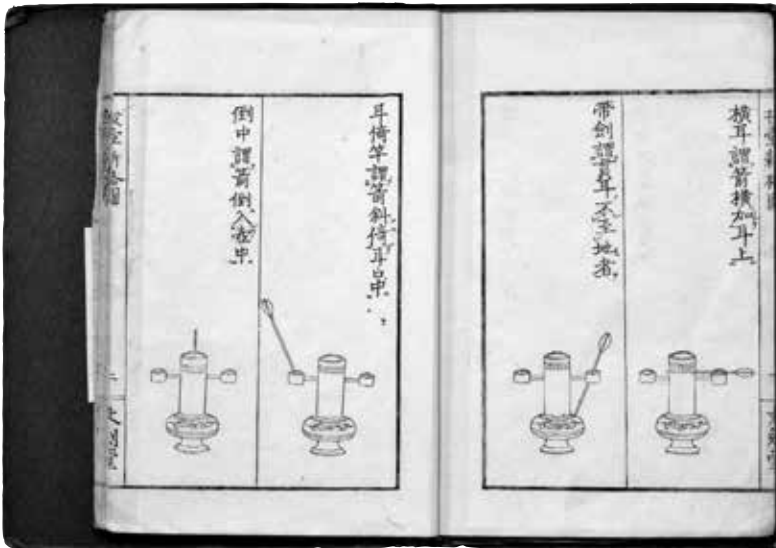


3-20

相撲隠雲解

[式守蝸牛著]

現在まで続く相撲行司の名跡、式守伊之助。その初代が寛政5（1793）年の引退後、式守蝸牛と名乗り著した著作の写本。相撲の濫觴（起源）、歴史を絵入りで解説する。上覧相撲の取組表や四十八手の解説も掲載されている。



3-21

投壺新格・投壺儀節

(宋) 司馬光更定 (日本) 田中清補正 (日本) 神有則校讐 明和6（1769）年跋 [刊]

司馬光が著した投壺の専門書。投壺とは中国で誕生した伝統的な余興用のゲームで、壺を地面や床に置き、それに向かって矢を投げ入れるというもの。『投壺新格』がルールブック、『投壺儀節』は道具や人員配置を記した手順書。「牽舟居士蔵」の識語から、若年時の読書とわかる。

人脈のなかで

鷗外は東京大学医学部の同期、先輩、後輩はもちろんのこと、留学先のドイツで出会った哲学者井上哲次郎をはじめ、医学とは異なる幅広い分野の人々とも交友を深めた。

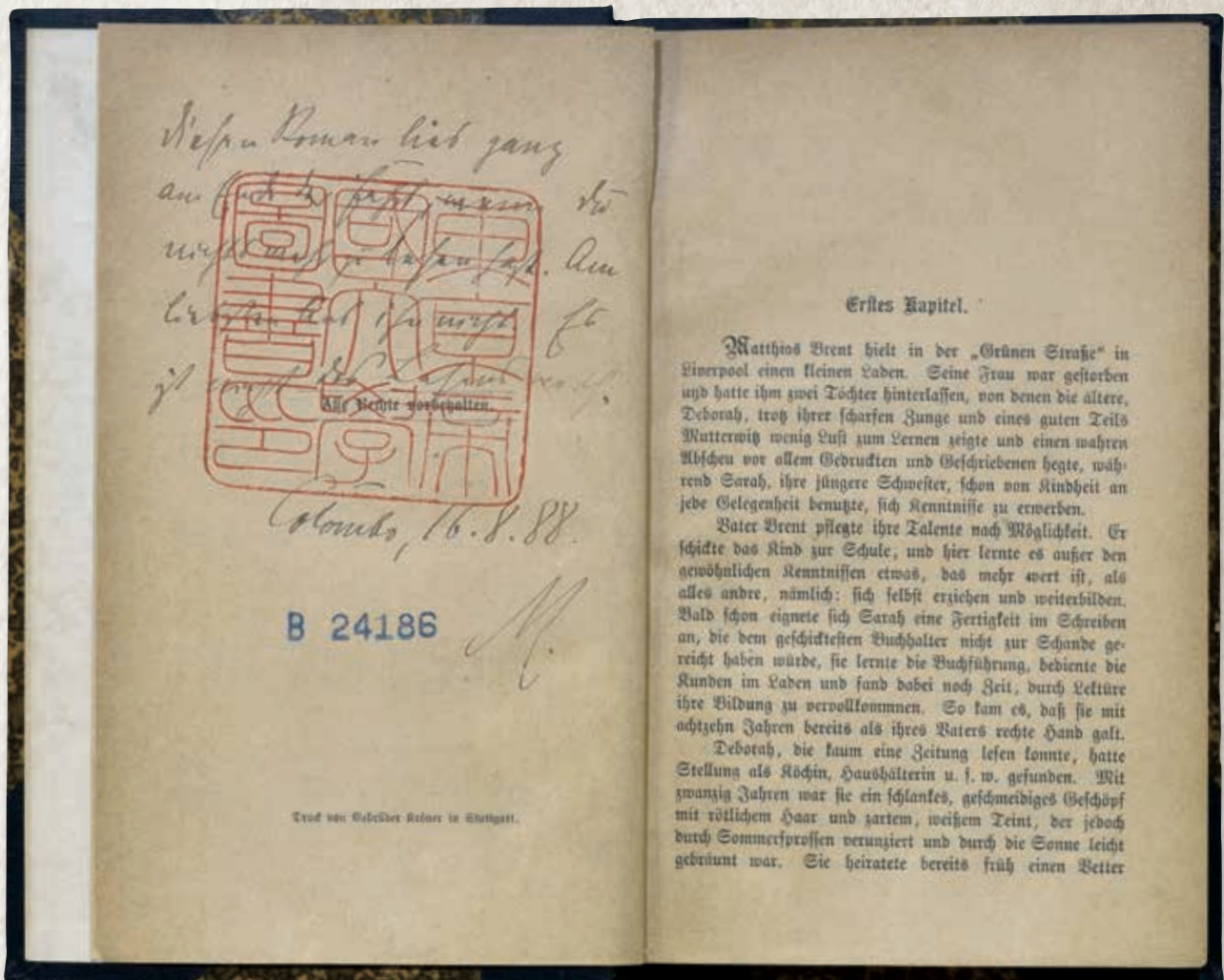
東京美術学校で美術解剖学や西洋美術史など、慶應義塾大学で審美学を教え、軍医の職を退いた後には帝室博物館総長兼図書頭、帝国美術院初代院長を務めるなど美術界とも関わりが深く、美術家の友人も多かった。

文学の面では、留学から帰国後に活動を本格化、明治22（1889）年に文芸雑誌『しがらみ草紙』を創刊し、坪内逍遙、幸田露伴らがこれに寄稿。『しがらみ草紙』の後身として明治29（1896）年に創刊した『めさまし草』には饗庭篁村や、正岡子規・高浜虚子ら根岸短歌会の俳人などが寄稿した。

明治40（1907）年には『明星』派の代表与謝野鉄幹、『アララギ』派の代表伊藤左千夫、『心の花』派の代表佐佐木信綱を自宅に招き、観潮楼歌会を開いた。この歌会には若手の歌人も加わり、派を超えた交流の場として明治43（1910）年まで続けられた。

また、若い文学者にも慕われ、明治42（1909）年に石川啄木、吉井勇らが創刊し、自身が名付け親となった文芸雑誌『スバル』や、明治43（1910）年に永井荷風が創刊した『三田文学』にも数多く寄稿した。

この章では鷗外の人脈、その多彩な顔触れが垣間見える資料を紹介する。



4-21

Ein einfach Herz : ein Roman aus dem Leben

von Charles Reade ; autorisierte Uebersetzung aus dem Englischen von
S. Busch von Besa 1887 (明治20) 年刊

英国の小説家チャールズ・リード作 *Single Heart, and Double Face* の独訳本。ドイツ留学からの帰途、コロンボにて、別の船で日本に向っている恋人エリーゼ・ヴィーゲルトに残した本とされる。エリーゼは鷗外と結ばれることなくドイツに帰国、「舞姫」のヒロインであるエリスのモデルになった。書入れの独語は「この小説は、旅の最後にもう他に何も読むものがなくなった時に読みなさい。まあ読まない方がいい。読む値打ちがない」の意（中井義幸『鷗外留学始末』）。



4-3

[吉井勇集]・[長田秀雄集]・ [秋田雨雀集]

吉井勇 [ほか] 著

鷗外が名付け親となった文芸雑誌『スバル』の同人、吉井勇、長田秀雄、秋田雨雀が明治40（1907）年から大正2（1913）年にかけて、『新小説』『早稲田文学』等に発表した小説、戯曲類14篇。鷗外は『スバル』に「中々・セクスアリス」「青年」などを発表し、同人とも深いつながりがあった。

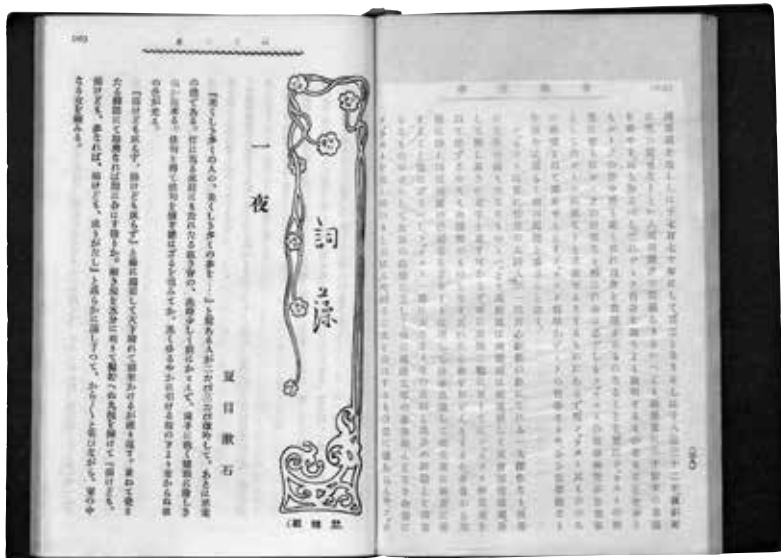


4-4

[永井荷風集]

永井荷風著

明治42（1909）年から大正2（1913）年にかけて、荷風が『中央公論』『三田文学』等に発表した小説、随筆、戯曲など13篇。荷風は鷗外を文学上の師と仰ぎ、敬愛し続けた。鷗外もまた、17歳年下の荷風の実力を認め、「面白い人」とその個性を評価し、明治43（1910）年には慶應義塾大学に推挙している。鷗外の手による製本の多くに、揃いの柿色表紙と自筆題箋が付されている。全篇の表題が記された題箋から、鷗外の各作家・作品への思いが感じられる。



4-1

幻影の盾・倫敦塔・一夜・ カーライル博物館・二百十日

夏目漱石著

『ホトトギス』明治38（1905）年4月号の附録として発表された「幻影の盾」、『帝国文学』明治38年1月号に掲載された「倫敦塔」など、初期夏目漱石の5つの短篇を1冊に綴じた本。鷗外と漱石は、明治29（1896）年1月、東京・根岸の正岡子規邸で初めて対面して以後、直接顔を合わせたのは数回であったが、互いの存在を認め著書等をやり取りしていた。



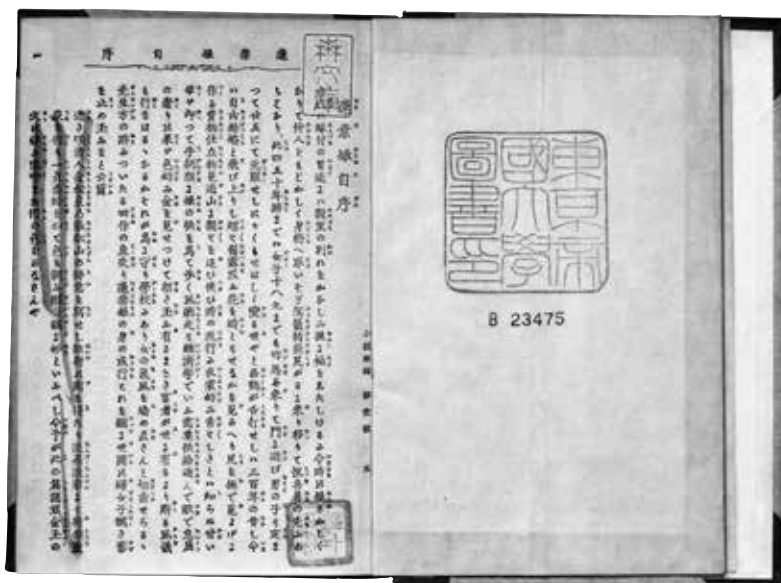
4-2

梔久物語・不安・當流人名辭書

幸田露伴著

『文藝倶楽部』明治33（1900）年1月・翌年1月に発表された「梔久物語」、および同時期に『新小説』に発表した随筆類など、幸田露伴の作品を集めて綴じた本。鷗外と露伴は20代から深い親交を持ち、明治29（1896）年創刊の文学雑誌『めざまし草』では、斎藤緑雨もまじえた3人で新作文芸合評「三人冗語」を展開した。

4-1、2はいずれも、鷗外が雑誌から抜き取り、自ら製本しなおしたと推定される。作品と関係のない箇所には、上から半紙を糊付けして隠すという、丁寧な造本が行われている。



4-5

蓮葉娘・川ぞひ柳・新殺生石

饗庭篁村著

明治21（1888）年に春陽堂が創刊した文芸雑誌、『小説萃錦』に掲載された小説3篇。作者の篁村は明治20年代に人気が高く、鷗外は「三人冗語」を拡大した合評会「雲中語」に招いている。「森文庫」印は、まだ学生だった鷗外が用いた、最も早い時期の蔵書印であり、蔵書中に残された印のなかで「森氏蔵書」に次いで多く使用されている。



4-6

芽生・歸朝者の日記・罨・十七の頃・指環・畜生・留爺・故郷の友

島崎藤村 [ほか] 著

明治42（1909）年刊の『中央公論』に発表された8名の作家（島崎藤村、永井荷風、田山花袋、佐藤紅緑、徳田秋聲、上司小剣、薄田泣菫、眞山青果）の作品を、1冊に製本したものを。

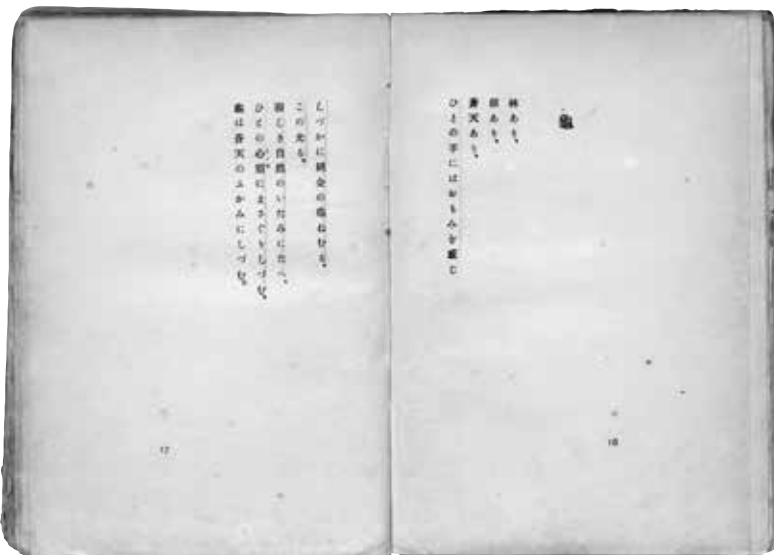


4-7

子規追悼集

高浜虚子編 明治35（1902）年刊

正岡子規が歿して3か月後、明治35（1902）年12月に発行された『ホトトギス』。鷗外は日清戦争の戦地にて、新聞『日本』の従軍記者だった子規に出会った。帰国後、鷗外は主宰する雑誌『めさまし草』の俳句欄を子規や高浜虚子らの一派に任せ、打ち解けた親交が続いた。



4-8

詩集月に吠える

萩原朔太郎著 大正6（1917）年刊

大正6（1917）年に刊行された萩原朔太郎の第1詩集。鷗外の書入れと思われる傍線が随所に見られる。朔太郎が本書をたずさえて鷗外を訪問した日の手紙には、「今日萩原朔太郎ト云フ詩人初対面イタシ候 銜氣ナドナキ好キ人ト存候」とあり、その人柄にも好感を抱いていた様子がうかがえる。



4-9

精神啓微：脳髓生理

呉秀三著 明治23（1890）年刊

呉秀三は精神病学者。帝国大学医科大学に学び、鷗外の弟篤次郎とは同期。ドイツ留学中の鷗外に手紙を送り、洋書の送付を依頼するなど早くから親交があった。「渋江抽斎」「北条霞亭」執筆に際しては、医学史家として情報提供も行っている。

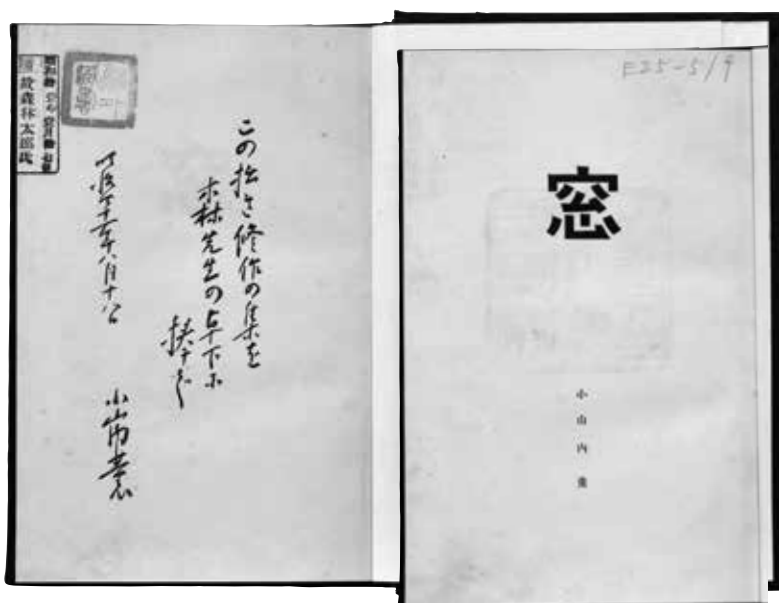


4-10

あいぬ醫事談

関場不二彦著 明治29（1896）年刊

関場不二彦は呉秀三らと同期の医師。帝国大学医科大学卒業後、同大助手を経て北海道へ赴任。アイヌの患者に関心を寄せ、本書を著した。鷗外の義弟小金井良精は、アイヌ研究で知られる人類学者であり、本書の参考文献には彼の論文も挙げられている。

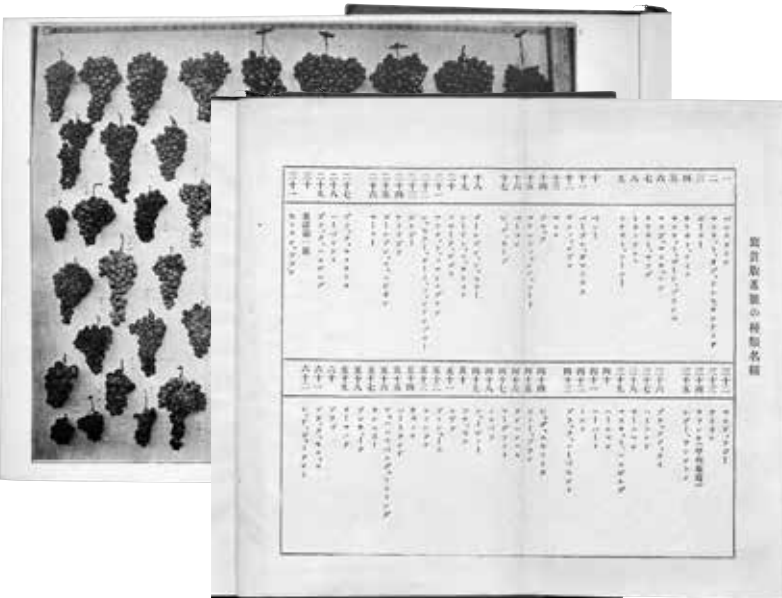


4-11

窓

小山内薫著 明治41（1908）年刊

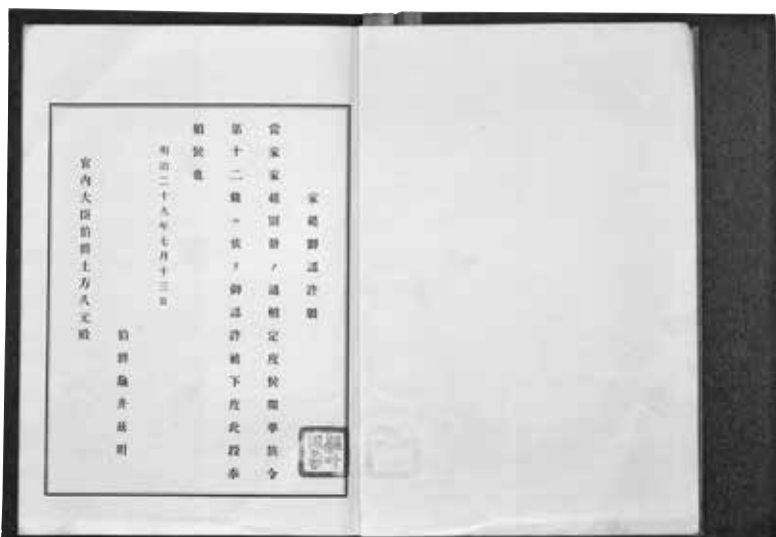
劇作家・演出家である小山内薫の第1短篇小説集。巻頭に印刷された鷗外への献辞に加え、鷗外文庫本には自筆献辞もある。刊行翌年に結成した自由劇場の第1回試演では、鷗外訳のイブセン「ジョン・ガブリエル・ボルクマン」が上演され、「青年」には公演の様子が書かれている。



4-12 葡萄種類説明

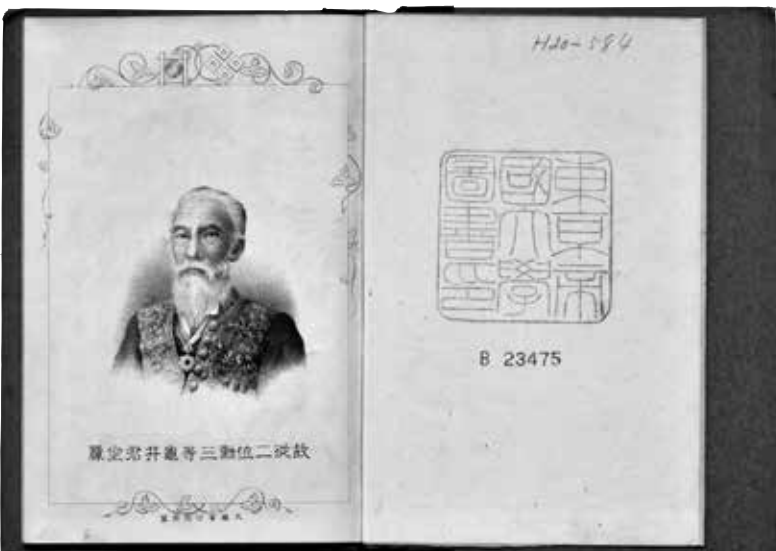
[川上善兵衛著]

岩の原葡萄園の創立者、川上善兵衛はワイン用品種マスカット・ベリーAを作出した園芸家で、日本ワインの父と称される。右派活動家の武田範之に親炙し、交流のあった鷗外に伝記執筆を依頼したがはたされず、自身で『武田範之伝：興亜前提史』を著した。



4-13 伯爵龜井家家範

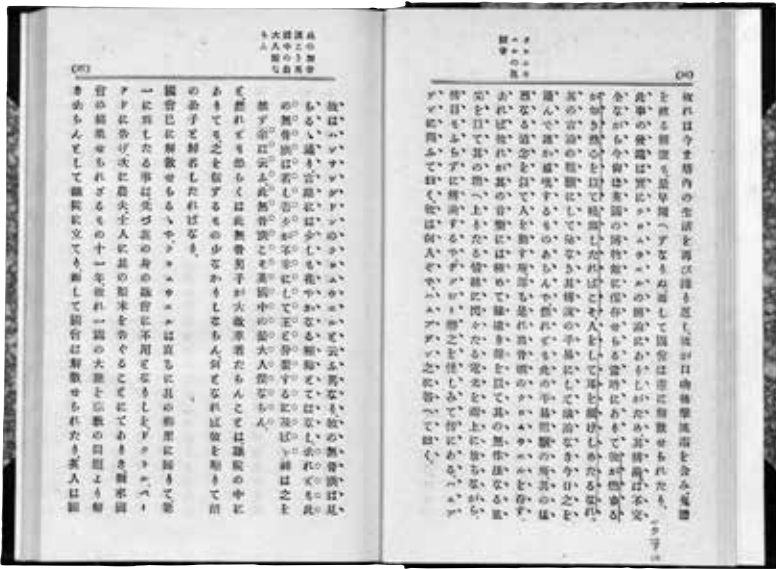
[龜井茲明編著] 明治29 (1896) 年刊



4-14 故從二位勲三等龜井君履歴

明治18 (1885) 年刊

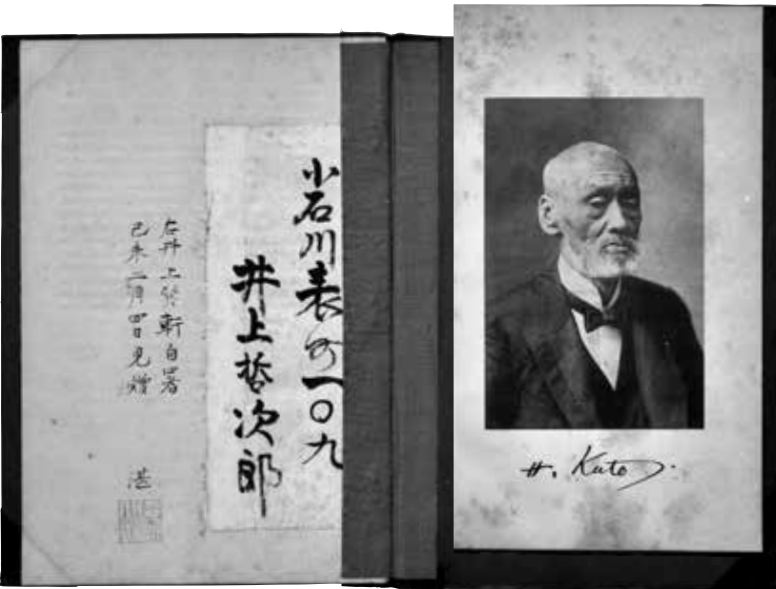
森家は代々、津和野藩の藩医であり、父静男は藩主亀井茲監（下の肖像）の侍医をつとめた。維新後に一家が上京したのも亀井家を頼ってのことで、以後鷗外は十三代当主茲明がドイツ留学した際、現地でサポートするなど、生涯にわたって深い関係を持った。



4-15 格朗空

竹越與三郎編 明治23 (1890) 年刊

イングランドの政治家クロムウェルの伝記。著者の竹越與三郎（三叉）は、首相の西園寺公望が文士たちを招いた雨声会の世話人だった。招待された鷗外は、明治40（1907）年6月18日の宴に出席した。三叉は西園寺から厚く信任され、後に貴族院議員となる。



4-16 Baron Kato

井上哲次郎著

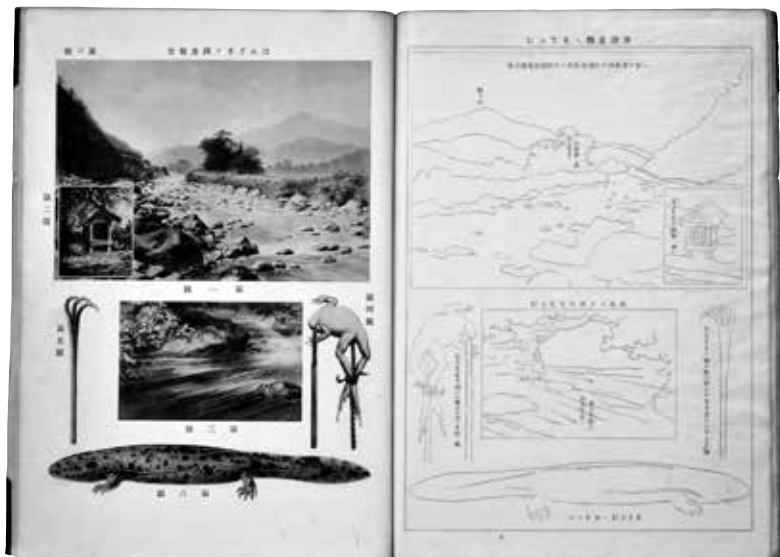
大正5（1916）年、井上哲次郎が『帝國學士院紀事』に寄せた、加藤弘之の追悼文。加藤は東京大学初代総理で、その長男の照磨と鷗外は、ドイツ留学中に多くの時間を共に過ごした。



4-17 文化と改造

桑木嚴翼著 大正10 (1921) 年刊

桑木嚴翼は帝国大学文科大学で井上哲次郎に学んだ哲学者。左右田喜一郎とともに新カント派の立場から文化主義を提唱し、大正デモクラシーの一翼を担った。長女の素子は、鷗外の甥である小金井良一に嫁した。

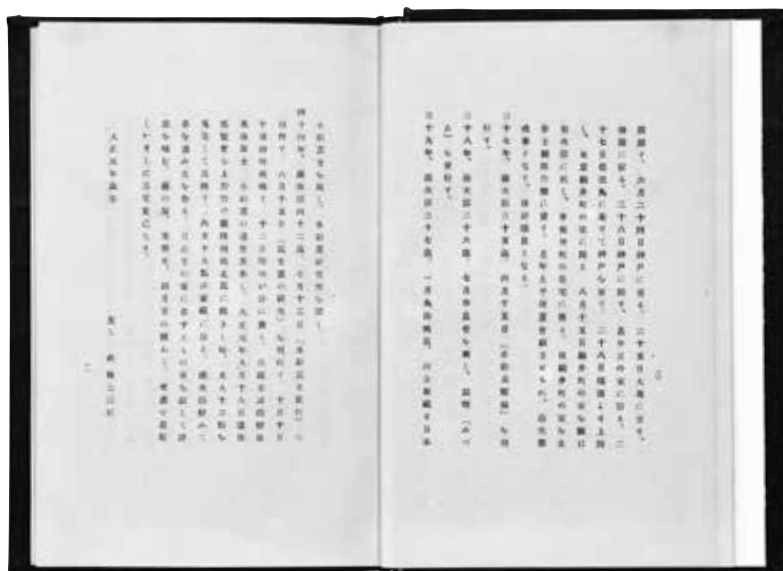


4-18

はんざき (鯢魚) 調査報告

石川千代松著 明治36 (1903) 年刊

著者の石川千代松は動物学者で、ドイツ留学中に鷗外と知りあった。明治33 (1900) 年から東京帝室博物館天産部長と動物園監督を兼任しており、この報告書はその頃に発行されたもの。森鷗外記念館所蔵の書簡からも交流がうかがえる。



4-19

大下藤次郎遺作集

大下春子著 大正元 (1912) 年刊

大下藤次郎は水彩画家で、師事した原田直次郎を通じて鷗外と知りあった。鷗外はその著書『水彩画之栞』(明治34 (1901) 年) に序文を寄せているほか、彼をモデルに小説「ながし」(大正2 (1913) 年) を書いた。この遺作集冒頭の年譜も鷗外の編。



4-20

支那繪畫小史

大村西崖著 明治43 (1910) 年刊

大村西崖は東京美術学校で教授をつとめた美術史家。明治30 (1897) 年に創刊した『美術評論』に、鷗外は「西洋美術史」はじめいくつもの文章を寄せたほか、共著として『審美綱領』『阿育王事蹟』や、岩村透らを加えた『洋画手引草』を出している。

作品への通路

これまでの章では、鷗外文庫資料の多種多様さ、ひいては森鷗外という人物の縦横無尽な知の広がりを見ていただいたが、この章ではいくつかの鷗外作品を取り上げ、原点となった図書や、作品に影響を与えたであろう資料などから鷗外文庫を紹介する。

鷗外は生涯をとおして数多くの作品を残しており、まず今回は歴史小説の中から「渋江抽斎」「大塩平八郎」「興津弥五右衛門の遺書」などを取り上げ、各作品の起点となった資料を紹介する。特に「渋江抽斎」では、渋江抽斎の子孫による資料群にご注目いただきたい。鷗外の書簡や日記によると、執筆に際しては知人や被伝者の子孫などに手紙を書いたり、面会したりして資料の収集を依頼していたことが分かる。こうして収集した資料や執筆のためのノートをまとめ、一冊の図書にしたものが鷗外文庫には含まれており（資料5-2、資料5-4）、これらは鷗外作品を研究する上で欠くことのできない重要な資料である。その他、小説の舞台となった地域の資料や、執筆にあたって参照したと思われる考証資料なども鷗外文庫にはある。また鷗外は多くの翻訳も手掛けており、訳詩集『於母影』に所収されている詩の原本や、歌劇「オルフェウス」の翻訳原本である *Orpheus und Eurydice* などもあり、これらの資料には鷗外の手による書入れも多く見られる。

鷗外の作品を読みたいと思ったとき、鷗外全集や文庫本など紙の本で閲読できるのはもちろん、現在は青空文庫や国立国会図書館デジタルコレクションなどインターネット上のコンテンツも数多く、かつ自由に利用できるようになっている。この展示会を契機に、鷗外作品を読み直したり、未読の作品を手にとっていただけたなら望外の喜びである。



5-2
抽齋年譜

[澁江保]

抽齋の七男・澁江保の原稿を鷗外が1冊に綴じた本。抽齋1歳から54歳までの年譜であり、一部に鷗外の書入れが見られる。編年体を取る『澁江抽齋』は、本書に大きく依拠する。(出口、一部改編)

Des Mädchens Geständniß.

Der Abend war so wunderschön,
Da gingen beide wir durch's Feld;
Die Sonne wollte untergehn
Und schien noch freundlich in die Welt;
Die Vögel sangen im Gebüsch,
Im Korn und in der blauen Luft;
Die Blumen blühten voll und reich,
Und um uns her war lauter Duft.

Wir war gar feierlich zu Mutz'
Und doch dabei ohnmächtig froh;
Ich war der ganzen Welt so gut,
Gott weiß, mir war noch niemals so.
Da sprachen wir denn allerlei,
Wovon, das weiß ich selbst nicht mehr,
Und er war auch so gut dabei
Und ging so stille nebenher.

Doch als ich einmal mich gewandt,
Ich weiß nicht mehr aus welchem Grund,
Da brüllt' er zärtlich meine Hand
Und küßt' mich leise auf den Mund;
Und ich, ich konnt' nicht widerstehn,
Ich habe wieder ihn geküßt,
Und kann noch immer nicht verstehen,
Wie's mir nur eingefallen ist.

Doch bin ich wirklich mir bewußt,
Dass dieser Kuß nichts Neues war;
War's doch nachher in meiner Brust
So rein, wie es gewesen war.
Ich küßt' auch Jedem gern gelien,
Der treuend mir begegnet war.
Und doch — war es ein andrer Mann —
Se nun — das fragt sich doch noch Ich.

その心を
たゞ
おぼ
え
の
こ
ろ
に
あ
ら
わ
せ
て
ま
さ
し
め
る

Curiose Geschichte.

Ich bin einmal etwas hinausspaziert,
Da ist mir ein närrisches Ding passiert:
Ich sah einen Jäger am Waldbesuche,
Ritt auf und nieder den See entlang;
Viel Hirsche sprangen am Wege dicht;
Was that der Jäger? — Er schoß sie nicht,
Er blies ein Lied in den Wald hinein —
Nun sagt mir, ihr Leut', was soll das sein?

Und als ich weiter hin fortspaziert,
Ist wieder ein närrisch Ding mir passiert:
Im kleinen Kahn eine Fischerin
Rühr stets am Waldbesuche dahin;
Nun sprangen die Fischlein im Abendlicht:
Was that das Mädchen? — Sie sang sie nicht,
Sie sang ein Lied in den Wald hinein —
Nun sagt mir, ihr Leut', was soll das sein?

Und als ich wieder zurückspaziert,
Da ist mir das närrischste Ding passiert:
Ein leeres Pferd mir entgegenkam,
Im See ein leerer Näschen schwamm;
Und als ich ging an den Ufer vorbei,
Was hör' ich drinnen? Da kisterten Fesseln,
Und 's war schon spät und Abenddämmerung —
Nun sagt mir, ihr Leut', was soll das sein?

近
千
滑
昔
聞
可
奇

Max Kemp.

Selig sind die Sanftmüthigen.
Milde des Herzens, in früher Jugend
Sei sie gelehrt, sei sie gepflegt!
Sei durch der Mütter zärtliche Sorge
Liel in die Menschenbrust gelegt!

5-17

Deutsche Lyrik : seit Goethe's Tode

Ausgewählt von Maximilian Bern

ゲーテ以後のドイツ詩を集めたアンソロジー、マクシミリアン・ベルン編『ドイツ詩集』。書入れは留学中のもと考えられ、「名文」「絶調」など率直な感想が残されている。明治22（1889）年の訳詩集「於母影」に含まれる「思郷」「あまおとめ」などの翻訳原本にもなった。（河野、一部改編）

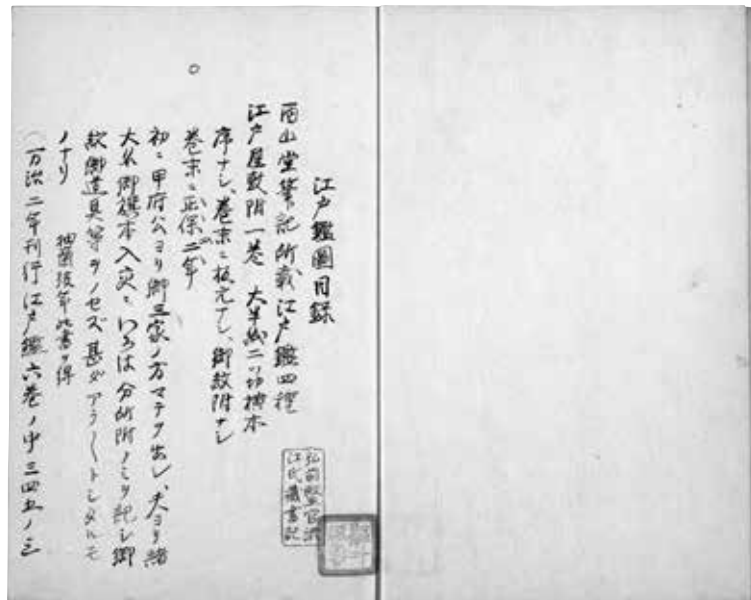


5-1

経籍訪古志 6卷補遺1巻

渋江抽斎, 森枳園 [撰] 光緒11 (1885) 年序 [刊]

渋江抽斎や森枳園らの執筆による、国内に存する古漢籍や古写本等の書誌をまとめた本。近世書誌学の金字塔で、後に上海にて上梓された。江戸武鑑に見出した「弘前医官渋江氏蔵書記」の印記が、本書の著者の蔵書印と教えられ、史伝「渋江抽斎」の執筆に結びついた。

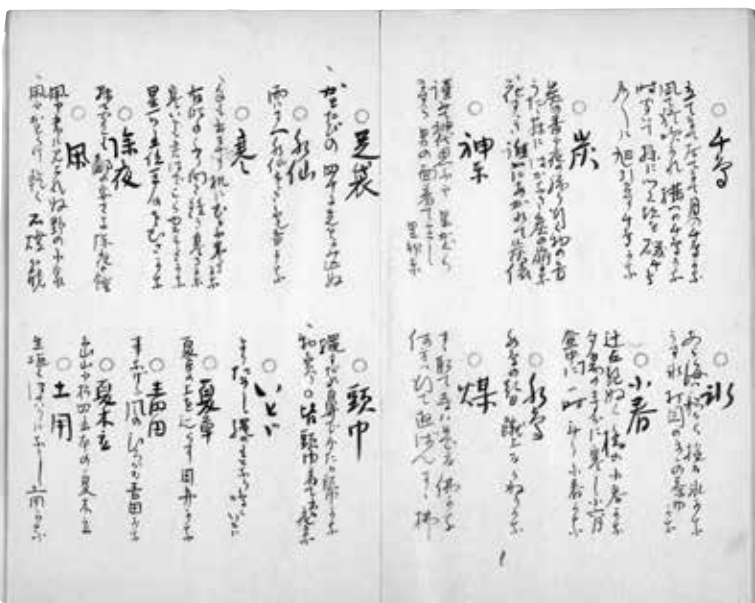


5-3

江戸鑑圖目録

大正4 (1915) 年

渋江抽斎が蔵していた江戸鑑や御紋尽、分限帳など古武鑑や江戸図の目録であり、「弘前医官渋江氏蔵書記」の印が押されていたことがわかる資料。鷗外が、「渋江氏」が抽斎と同一人物ではないかと考えるきっかけとなった、重要な資料と考えられている。(神田、一部改編)

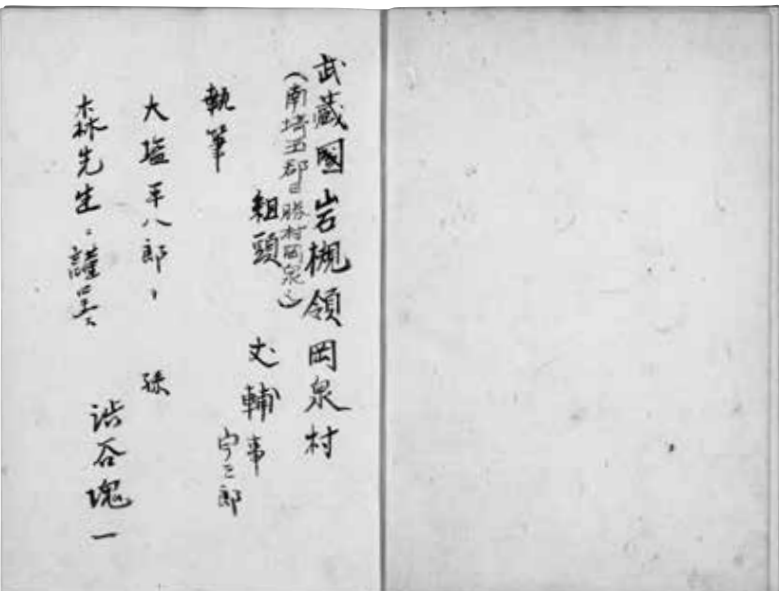


5-4

澁江脩略傳附句鈔

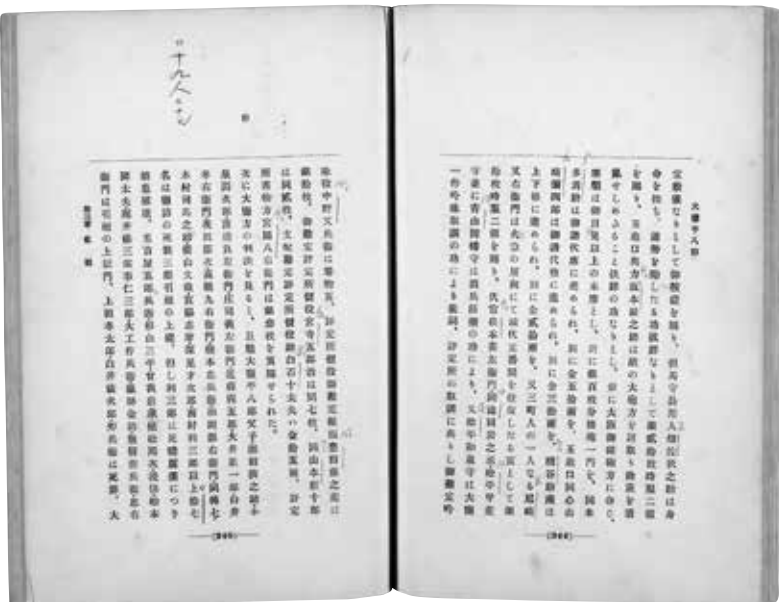
[澁江終吉, 澁江脩著]

抽斎の五男・渋江脩の息子である渋江終吉の原稿を鷗外が1冊に綴じた本。吟月と号した脩の句240を収める。句の一部は、『渋江抽斎』その百十一に抄出されている。(出口、一部改編)



5-5 大塩平八郎

展示部分の2丁表には「武藏國岩槻領岡泉村／組頭文輔事／宇三郎／執筆／大塩平八郎ヲ森先生ニ謹呈ス／孫／洪谷塊一」とあり、鷗外の筆で「(南埼玉郡日勝村岡泉也)」と注記がある。『大塩平八郎』執筆の際に参考とされた資料と考えられる。



5-6 大塩平八郎

幸田成友著 明治43 (1910) 年

歴史小説『大塩平八郎』は本書に多く依拠していると考えられており、鷗外自身も評論「大塩平八郎」(『三田文学』大正3 (1914) 年1月)において、この資料を読んだことを記している。(出口、一部改編)



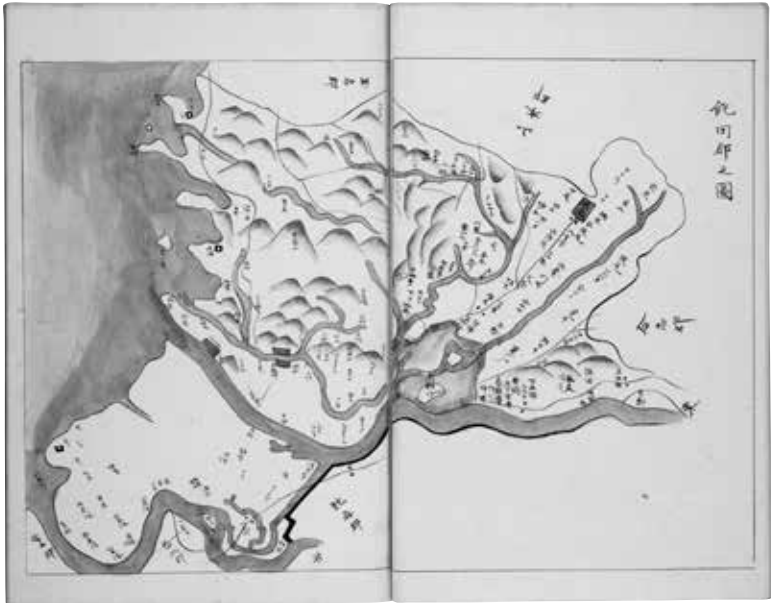
5-7
興津又二郎覺書寫

寛政8 (1796) 年

5-8
興津家由緒書

[興津宗也録]

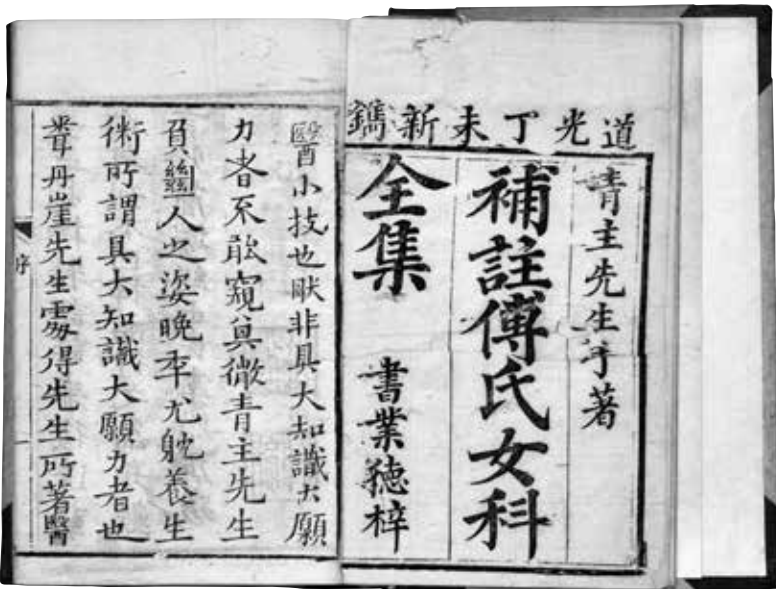
改稿「興津弥五右衛門の遺書」の資料。同作の初稿は大正元（1912）年に発表されたが、その後これらの資料を入手して改稿され、翌大正2（1913）年の単行本『意地』に収録された。同年4月3日の日記に、「夕より興津弥五右衛門に関する史料を整理す」とある。（出口、一部改編）



5-9
肥後國志略

森本一瑞謹誌

「阿部一族」「栗山大膳」などの歴史小説の舞台となった肥後熊本の地図史料。鷗外による地名その他の書入れがある。（多田、一部改編）



5-10

女科 2巻；産後編 2巻

(清) 傅青主著；(清) 宋傲祁 [校]
道光27 (1847) 年

鷗外文庫には産婦人科に関する資料がいくつか含まれ、本書もその1つ。明治44 (1911) 年の「カズイシチカ」(ラテン語で臨床記録の意) は、かつての父の診療を回想した短篇で、女性患者の妊娠を見抜くエピソードがある。その背景を思わせる資料である。



5-11

還魂紙料

柳亭種彦著 明治15 (1882) 年

江戸後期の戯作者、柳亭種彦の考証随筆。鷗外が同種の随筆である神沢杜口「翁草」に取材し、「興津弥五右衛門の遺書」「高瀬舟」を書いたことは有名で、その素材選択の背景に、選ばれなかった多くの蔵書の海があったことをうかがわせる資料である。

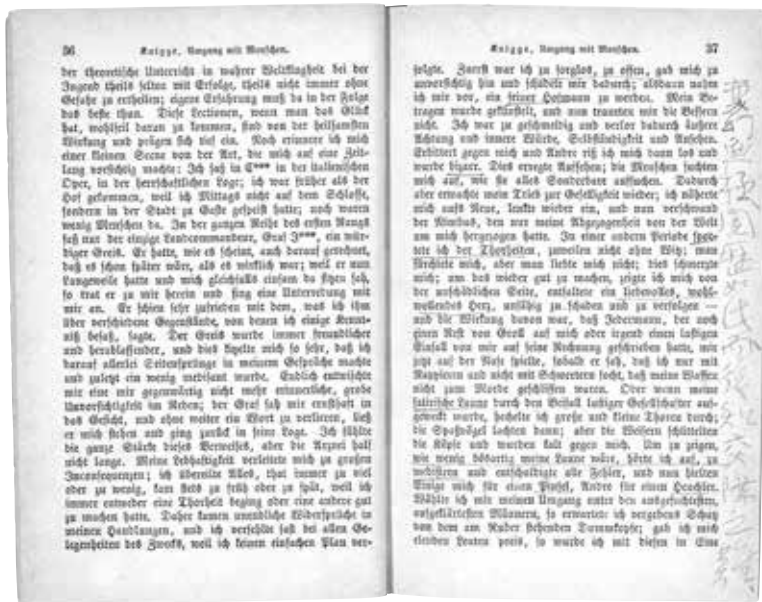


5-12

裁判百話

佐久間長敬講演

江戸南町奉行与力を務め、維新後は明治政府が設置した市政裁判所に勤務した佐久間長敬による、江戸時代の裁判に関する講演録。鷗外は「最後の一句」などの歴史小説で、江戸の裁判の様子を幾度か書いており、執筆にあたって参照された可能性もあるだろう。

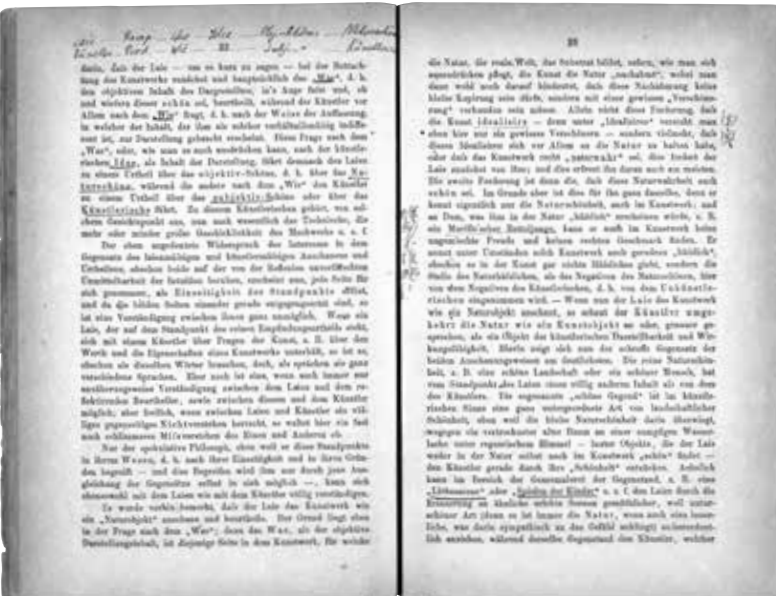


5-13

Ueber den Umgang mit Menschen

von Adolph Freiherrn [sic] Knigge [1878?] (明治11?) 年

大衆作家クニグゲによる、一般向け人生論。「うたかたの記」ではマリイが家庭教師に借りて読んだ本として登場する。序章、第1章には書入れが多数ある。鷗外の格言集「智恵袋」「心頭語」の大部分は本書からの抄訳である。(河野、一部改編)

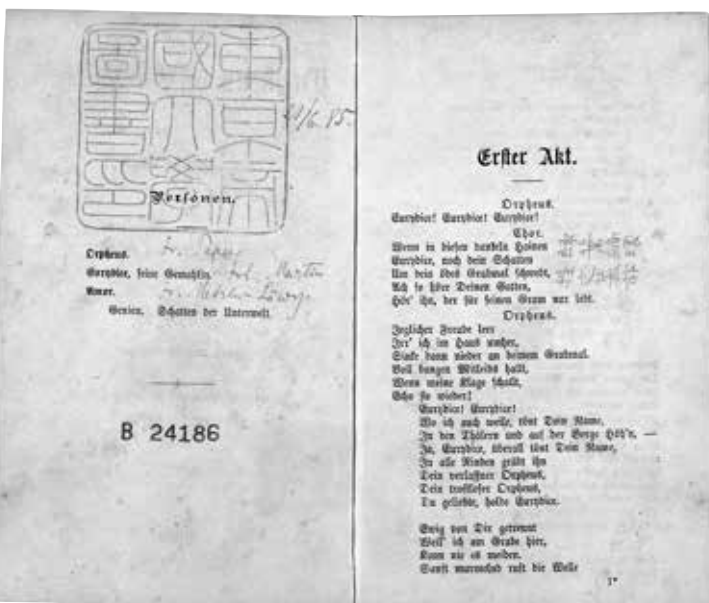


5-14

Kritische Geschichte der Aesthetik : Grundlegung für die Aesthetik als Philosophie des Schönen und der Kunst

von Max Schasler 1872 (明治4) 年

表紙裏の遊紙に、同時期にドイツに留学していた洋画家、原田直次郎の署名があり、彼から鷗外の手に渡ったと推定される。原田は「うたかたの記」の画学生、巨勢のモデルであり、明治32(1899)年に早世した際、鷗外は「原田直次郎」を書いてその死を悼んだ。(山田、一部改編)



5-15

Orpheus und Eurydice : Oper in drei Akten

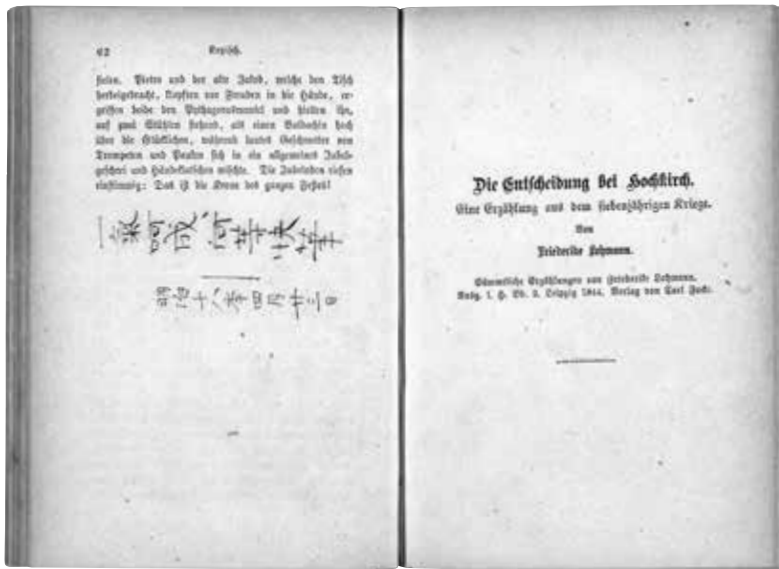
Christoph Willibald Gluck

05-16

沙羅の木 : 詩集 【個人蔵】

森鷗外 大正4 (1915) 年

ライプツィヒ市立劇場での公演用として作成された台本。表紙には、鷗外が劇場で鑑賞した日付と、歌手の名前が記されている。また、鷗外はこれを底本として翻訳も行い、第1稿「未定訳稿オルフエウス」を修正したのが、第2訳稿『Orpheus (沙羅の木)』である。しかし、これが鷗外存命中に上演されることはなく、2005(平成17)年に行われた東京藝術大学奏楽堂での舞台が初演である。(河野・山田、一部改編)



5-18

Deutscher Novellenschatz

herausgegeben von Paul Heyse und Hermann Kurz

24巻から成る短篇集で、ほぼすべての作品で読後感と読了日が記載されており、ライプツィヒ時代の読書歴を知ることができる。所収作のうち、ハックレンデルのZwei Nächteは、「ふた夜」(明治23(1890)年)の翻訳原本である。(山田、一部改編)

1. 医学生鷗外

- ・小堀桂一郎. 若き日の森鷗外. 東京大学出版会, 1969
- ・中井義幸. 鷗外留学始末. 岩波書店, 1999
- ・文京区立森鷗外記念館編. ドクトル・リントロウ医学者としての鷗外：文京区立森鷗外記念館平成二十七（二〇一五）年度特別展. 文京区立森鷗外記念館, 2015
- ・日本国語大辞典第二版編集委員会；小学館国語辞典編集部；北原保雄. 日本国語大辞典. 小学館, 2000
- ・文京区立鷗外記念本郷図書館編. 鷗外愛用の品々：所蔵資料図録；第2集「手回品・生前記念品・家蔵品ほか」. 文京区教育委員会, 2004
- ・中尾和昇. 『松染情史秋七草』論. 関西大学国文学会, 2008, (国文学, 92)
- ・中島国彦. 森鷗外 学芸の散歩者. 岩波書店, 2022
- ・デジタル国史大辞典. 「蘭學事始」の項. available from JapanKnowledge, (accessed 2022-08-18)
- ・デジタル日本大百科全書(ニッポニカ). 「傷寒論」の項. available from JapanKnowledge, (accessed 2022-08-18)
- ・文化デジタルライブラリー. 「千穉楽」の項. (accessed 2022-08-29)
- ・デジタル日本大百科全書(ニッポニカ). 中村完「小説神髓」の項. available from JapanKnowledge, (accessed 2022-08-29)

2. 職務に向き合う

- ・志田信男. 鷗外は何故袴をはいて死んだのか：「非医」鷗外・森林太郎と脚気論争. 公人の友社, 2009
- ・山下政三. 鷗外森林太郎と脚気紛争. 日本評論社, 2008
- ・岡村健. 脚気論争の光と影：陸軍の脚気惨害はなぜ防げなかったのか. 梓書院, 2020
- ・平川祐弘編. 森鷗外事典. 新曜社, 2020
- ・小堀桂一郎. 森鷗外：日本はまだ普請中だ. ミネルヴァ書房, 2013
- ・浅井卓夫. 軍医鷗外森林太郎の生涯. 教育出版センター, 1986
- ・荒木肇. 脚気と軍隊：陸海軍医団の対立. 並木書房, 2017
- ・伊達一男. 腸チフス予防接種と森鷗外. 医学史研究. 1968, 第28号, p.30-32.
- ・石田頼房. 森鷗外の都市論とその時代. 日本経済評論社, 1999
- ・中尾麻伊香. 近代化を抱擁する温泉：大正期のラジウム温泉ブームにおける放射線医学の役割. 科学史研究. 2013, 52巻268号, p.187-199.
- ・末延芳晴. 森鷗外と日清・日露戦争. 平凡社, 2008
- ・森潤三郎. 鷗外森林太郎. 丸井書店, 1942.
- ・三瓶弘子. 森鷗外の「假名遣意見」をめぐって. 麗澤大学紀要. 1986, 43巻, p.131-155.
- ・佐藤泰正編. 鷗外を読む. 笠間書院, 2000. (笠間ライブラリー 梅光女学院大学公開講座論集, 第46集).
- ・秋山光夫. 博物館総長時代. 文藝. 1962, 1巻6号, p.170-171.
- ・東京国立博物館編集. 東京国立博物館百年史. 東京国立博物館, 1973.
- ・松嶋順正. 正倉院よもやま話. 学生社, 1989.
- ・山崎一穎. 森鷗外論攷. おうふう, 2006.
- ・山崎國紀. 評伝森鷗外. 大修館書店, 2007.
- ・須田喜代次. 位相鷗外森林太郎. 双文社出版, 2010.
- ・田良島哲. 大正期の正倉院拝観資格の拡大と帝室博物館総長森鷗外. Museum. 2017, No.666, p.29-46.
- ・沼倉延幸. 図書館頭森林太郎（鷗外）に関する基礎的考察－宮内公文書館所蔵資料を中心として－. 書陵部紀要. 2017, 68号, p.65-96.
- ・沼倉延幸. 図書館頭森林太郎（鷗外）に関する基礎的考察（二）－宮内公文書館所蔵資料及び外崎覚関係資料を中心として－. 書陵部紀要. 2019, 70号, p.23-46.
- ・日本芸術院編集. 日本芸術院史. 日本芸術院, 1979.

3. 知識への渴望

- ・渡辺英明. 悉曇梵語初学者の為に. 常楽寺, 1972
- ・東京大学総合図書館所蔵鷗外文庫展展示目録. 東京大学附属図書館. [1983]
- ・尾形侑・小林祥次郎共編. 近世後期歳時記本文集成並びに総合索引. 勉誠社, 1984
- ・布目潮風編. 中國茶書全集 (下巻). 汲古書院, 1987
- ・筒井紘一著. 茶書の系譜. 文一総合出版, 1978
- ・鈴木重春. 大匠手鑑・西村権右衛門. 秘伝書図解・大工規矩尺集. 恒和出版, 1982 (江戸科学古典叢書, 35)
- ・高橋浩徳. 中国・朝鮮・日本における投壺遊戯の盛衰. 大阪商業大学アミューズメント産業研究所紀要. 2017, 19, p.45-104

4. 人脈のなかで

- ・中井義幸編. 鷗外印譜. 青裳堂出版, 1988, (日本書誌学大系, 58)
- ・富士川英郎. 萩原朔太郎雑誌. 小沢書店, 1979
- ・文京区立森鷗外記念館編. 永井荷風と鷗外: 荷風生誕140年・没後60年記念: 特別展. 文京区立森鷗外記念館, 2019
- ・根本文子. 子規の『俳諧大要』執筆の動機—鷗外との出会いをめぐる—. 東洋大学大学院紀要. 2015, 52集, p.101-122
- ・森鷗外. 阿部一族・舞姫. 新潮社, 2006, (新潮文庫, 1790, も-1-4)
- ・森鷗外. 鷗外全集. 第23巻. 岩波書店, 1973
- ・岡崎義恵. 森鷗外と夏目漱石. 宝文館出版, 1973
- ・坂井修一. 森鷗外の百首: テエバス百門の抒情. ふらんす堂, 2021
- ・文京区立森鷗外記念館企画・編集. 森鷗外宛書簡集: 文京区立森鷗外記念館所蔵. 2: あ-い 編. 文京区立森鷗外記念館, 2019
- ・文京区立森鷗外記念館編. 日本からの手紙: 文京区立森鷗外記念館所蔵滞独時代森鷗外宛1884-1886. 文京区立森鷗外記念館, 2018
- ・關場不二彦先生生誕百年記念會編纂. 関場理堂選集. 金原出版, 1966
- ・東京国立博物館編. 東京国立博物館百年史. 東京国立博物館, 1973
- ・六草いちか. 鷗外の恋: 舞姫エリスの真実. 講談社, 2011
- ・苦木虎雄. 鷗外研究年表. 鷗出版, 2006
- ・海堂尊. 森鷗外. 筑摩書房, 2022, (ちくまプリマー新書, 399, よみがえる天才, 8)
- ・日本近代文学大事典. 「小山内 薫」の項. available from JapanKnowledge, (accessed 2022-08-29)
- ・日本人名大辞典. 「川上善兵衛」の項. available from JapanKnowledge, (accessed 2022-09-01)
- ・小谷瑛輔, 出口智之. 「隆熙改元祕事」解説. 鷗外文庫書入本画像データベース, (accessed 2022-08-29)
- ・岩の原葡萄園ホームページ. 「葡萄園について」, <https://www.iwanohara.sgn.ne.jp/> (accessed 2022-09-01)
- ・国史大辞典. 「桑木巖翼」の項. available from JapanKnowledge, (accessed 2022-08-29)
- ・平川祐弘編. 森鷗外事典. 「医学の友人」「大下藤次郎」「亀井家」「亀井茲明」「森家略系図」「森鷗外年譜」の項. 新曜社, 2020

5. 作品への通路

- ・湯原公浩編. 森鷗外: 近代文学界の傑人. 平凡社, 2012 (別冊太陽 日本のこころ, 193)
- ・森鷗外著. 鷗外歴史文學集. 岩波書店, 1999-
- ・森鷗外著. 渋江抽斎. 岩波書店, 1999 (岩波文庫; 緑 (31) -5-8)
- ・森鷗外著. 蛇; カズイスタチカほか. 岩波書店, 2013 (鷗外近代小説集, 第5巻)
- ・森林太郎著, 木下空太郎 [ほか] 編. 鷗外全集 第19巻. 岩波書店, 1971-1975
- ・森林太郎著. 沙羅の木: 詩歌集. 阿蘭陀書房, 1915
- ・宮崎十三八, 安岡昭男編. 幕末維新人名事典. 新人物往来社, 1994
- ・市古貞次 [ほか] 編. 国書人名辞典. 岩波書店, 1993-1999
- ・日本大百科全書. 小学館, 1984-1994

展示資料一覧

請求記号欄に「個人蔵」とあるもの以外は、東京大学総合図書館所蔵。

DB収録欄に“*”がついている資料は以下のURL「鷗外文庫書入本画像データベース」で全文または書入れ部分を閲覧できる。<https://iif.dl.itc.u-tokyo.ac.jp/repo/s/ogai/>

資料番号	DB収録	書名	請求記号
I		ガブリエーレ・ロセッティのダンテ受容に関する草稿	
II		Die Grenzboten : Zeitschrift für Politik und Literatur	鷗 ZA : G828
1-1	*	詩經	鷗 B60 : 1121
1-2	*	周易	鷗 B60 : 1112
1-3		蘭學事始	鷗 V10 : 72
1-4		傷寒論文字攷	鷗 V11 : 105
1-5	*	大倭本草	鷗 T81 : 45
1-6		藥草畧譜	鷗 V30 : 13
1-7		Felix von Niemeyer's Lehrbuch der speciellen Pathologie und Therapie mit besonderer Rücksicht auf Physiologie und pathologische Anatomie	鷗 V250 : 88
1-8	*	辨名	鷗 B60 : 1101
1-8		辨道	鷗 B60 : 1047
1-9		東京帝國大學醫科大學並同學醫學部卒業生氏名録	鷗 V10 : 15
1-10		Das preussische Militär-Medizinal-Wesen in systematischer Darstellung	鷗 V000 : 597 : 1
1-11		Kurzgefasstes lateinisch-deutsches und deutsch-lateinisches Handwörterbuch : mit einem Verzeichnisse lateinischer Abbrüviaturen und geographischer Namen	鷗 D100 : 313
1-12	*	頼豪阿闍梨恠単傳引用群書要語	鷗 E24 : 253
1-13		絲櫻春蝶奇縁	鷗 E24 : 338
1-14		松染情史秋七草	鷗 E24 : 341
1-15	*	小説神髓	鷗 E20 : 32
1-16	*	Für die Feuerbestattung	鷗 V330 : 161
1-17		Verdeutschungs-Wörterbuch	鷗 D270 : 58
2-1		Noticen, 1884-86	鷗 A100 : 1654
2-2		日本米食史	鷗 V10 : 58
2-3		臺灣ヲ巡視シ戍兵ノ衛生ニ付キ意見	鷗 V46 : 35
2-4		明治二十七年、二十八年役第二軍軍醫部報告	鷗 V10 : 39
2-5		Die Cholera : Was kann der Staat thun, sie zu verhüten?	鷗 V550 : 55
2-6		Die Typhusepidemie von 1889 in Berlin	鷗 V550 : 40
2-7		東京市區改正委員會議定顛末	鷗 M30 : 59
2-8		日本鑛泉ラヂウムエマナチオン含有量表	鷗 V10 : 50
2-9		日本住血吸蟲病豫防法	鷗 V43 : 5
2-10		大戰學理	鷗 W30 : 33
2-11	*	Vom Kriege : hinterlassenes Werk des Generals Carl von Clausewitz	鷗 W200 : 48
2-12		臺灣誌	鷗 J30 : 303

資料番号	DB収録	書名	請求記号
2-13		朝鮮鐵道線路案内	鷗 J40:89
2-14		樺太殖民政策	鷗 N80:28
2-15		支那印象記	鷗 J50:264
2-16		日清對譯戰陣要語	鷗 SW:2
2-17		唧筒使用法	鷗 U30:6
2-18		臨時假名遣調査委員會議事速記録	鷗 D30:222
2-19	*	寮館事略	鷗 A90:259
2-20		正倉院樂器の調査報告	鷗 F20:44
2-21		帝國美術院第三回美術展覽會陳列品目錄	鷗 ZF:26
3-1	*	塵冢	鷗 A90:443
3-2		字記捷覽 2 卷	鷗 C40:1084
3-3		説文易檢	鷗 D40:618
3-4		俳諧五子稿	鷗 E32:120
3-5		俳諧手挑灯	鷗 SE:26
3-6		煎茶訣	鷗 YB20:87
3-7	*	釋小記續	鷗 C40:1112
3-8		世界宗教一斑	鷗 C10:30
3-9	*	勞働問題批判	鷗 S30:68
3-10		勞働問題の現在及將來	鷗 S30:366
3-11		我国資本家階級の発達と資本主義的精神	鷗 S40:151
3-12		社會改造の原理	鷗 S20:100
3-13		大匠手鑑 全	鷗 U40:39
3-14		古刀鍛冶銘尽	鷗 SW:10
3-15	*	樂小記續	鷗 F20:63
3-16		乘馬運動書	鷗 YB30:23
3-17		日本鳥類圖説	鷗 T86:84
3-18		日本藻類名彙	鷗 T83:45
3-19		富士山植物目錄	鷗 T83:31
3-20		相撲隱雲解	鷗 YB30:27
3-21		投壺新格・投壺儀節	鷗 YB30:31
3-22	*	長祿江戸圖	鷗 U40:36
4-1		幻影の盾・倫敦塔・一夜・カーライル博物館・二百十日	鷗 E25:124
4-2		椀久物語・不安・當流人名辭書	鷗 E39:62
4-3		[吉井勇集]・[長田秀雄集]・[秋田雨雀集]	鷗 E22:62
4-4		[永井荷風集]	鷗 E22:70
4-5		蓮葉娘・川ぞひ柳・新殺生石	鷗 E25:103

展示資料一覽

資料番号	DB収録	書名	請求記号
4-6		芽生・歸朝者の日記・畏・十七の頃・指環・畜生・留爺・故郷の友	鷗 E25:129
4-7		子規追悼集	鷗 E32:118
4-8		詩集月に吠える	鷗 E33:73
4-9		精神啓微：腦髓生理	鷗 V23:11
4-10		あいぬ醫事談	鷗 V10:46
4-11		窓	鷗 E25:519
4-12		葡萄種類説明	鷗 T83:53
4-13		伯爵龜井家家範	鷗 B40:500
4-14		故従二位勲三等龜井君履歴	鷗 H20:584
4-15		格朗空	鷗 H40:10
4-16		Baron Kato	鷗 H400:422
4-17		文化と改造	鷗 B10:37
4-18		はんざき(鮎魚)調査報告	鷗 T40:10
4-19		大下藤次郎遺作集	鷗 F30:202
4-20		支那繪畫小史	鷗 F30:196
4-21		Ein einfach Herz : ein Roman aus dem Leben	鷗 E200:3357
5-1		經籍訪古志 6 卷補遺 1 卷	鷗 A10:18
5-2	*	抽齋年譜	鷗 H20:511
5-3	*	江戸鑑圖目録	鷗 A10:209
5-4	*	澀江脩略傳坴句鈔	鷗 H20:519
5-5	*	大塩平八郎	鷗 G27:184
5-6	*	大鹽平八郎	鷗 H20:334
5-7	*	興津又二郎覺書寫	鷗 H20:442
5-8	*	興津家由緒書	鷗 H20:432
5-9	*	肥後國志略	鷗 J30:363
5-10		女科 2 卷 ; 産後編 2 卷	鷗 V11:153
5-11		還魂紙料	鷗 A90:304
5-12		裁判百話	鷗 B40:206
5-13	*	Ueber den Umgang mit Menschen	鷗 E400:380
5-14	*	Kritische Geschichte der Aesthetik : Grundlegung für die Aesthetik als Philosophie des Schönen und der Kunst	鷗 B800:19
5-15	*	Orpheus und Eurydice : Oper in drei Akten	鷗 F100:624
5-16		沙羅の木：詩集	個人蔵
5-17	*	Deutsche Lyrik : seit Goethe's Tode	鷗 E400:154
5-18	*	Deutscher Novellenschatz	鷗 E400:313

展示指揮

出口 智之（東京大学大学院総合文化研究科准教授）

令和4年度附属図書館所蔵資料展示委員会（委員は五十音順）

斎藤 未夏（委員長）

飯塚 亜子

石川 一樹

岩井 愛子

大江 暁園

大澤 類里佐

鈴木 剛紀

中竹 聖也

中村 美里

西村 昭子

原 香寿子

福嶋 涼

藤井 華織

堀 真弓

宮井 杏佳

若山 勇人

鷗外文庫書入本画像データベース解説執筆者（五十音順）

梅山 聡

神田 祥子

河野 至恩

合山 林太郎

小谷 瑛輔

渋谷 百合絵

多田 蔵人

出口 智之

目黒 文乃

山田 恵子

展示会 Web サイト

展示資料全点と関連情報を電子展示にてご覧いただけます。

<https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/html/tenjikai/tenjikai2022/index.html>



テエベス百門の断面図

— 歿後 100 年記念 森鷗外旧蔵書展 —

主 催	東京大学附属図書館
発行日	令和 4 年 10 月 13 日
編 集	東京大学附属図書館所蔵資料展示委員会
発 行	東京大学附属図書館 〒113-0033 東京都文京区本郷 7-3-1 電話 03-5841-2640 (情報サービス課)



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO